

# 異聞帯モルガンと人理 救済の旅

sorashido

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはもしもの物語。

異聞帯のモルガンが人理修復の旅に参加していたら。

※等と、云いつつ。

あんまり関係ないところの物語が多めになりそうな予感。

# 目次

プロローグ(前)	1
プロローグ(後)	12
炎上汚染都市：冬木	23
挨拶と契約	41
騎士王召喚	50
邪竜百年戦争オルレアン(1)	60
邪竜百年戦争オルレアン(2)	74
邪竜百年戦争オルレアン(3)	84
邪竜百年戦争オルレアン(4)	95
邪竜百年戦争オルレアン(終)	106
オルタの系譜	114
永続狂気帝国セプテム(1)	125



## プロローグ（前）

「魔女め！魔女め！」

怠慢だ、もっといい世界なんていくらでも作れたのに！」

「やめ、て—— 私を、玉座に——」

「役立たず！役立たず！」

「いらぬ！いらぬ！役立たずならもういらぬ！」

「玉座に、戻せ……！」

もう、ブリテンを、失いたく、ない……！」

（ああ……、私は、また、失敗、した、のか——……）

意識が徐々に薄れていく。

もう何も見えない、何も聞こえない。

先程まで感じていた痛みすらも感じなくなつた。

（バーヴァン・シー……）

## 2 プロローグ（前）

脳裏に浮かぶものは最期に見た、床へと投げ捨てられたその姿。

（ごめん、なさい……、私は、結局、あなたを、救えなかった……）  
その想いを最後に私の意識は暗闇へと消えていった。

—————  
—————  
—————  
—————  
—————  
……………

「はっ!？」

消えたはずの意識が突然覚醒する。

「な……、えっ……？、わ、私は……!?」

何が起こったのか全く分からずに混乱する。

自分の身体を確かめるようにぺたぺたと触ってみたが何ともない。

（何が起こった…!? 私は、あのまま死んだはず、では……？）

まずは冷静になろうと最後の記憶を思い出ししていく。

（玉座——妖精——バーヴァン・シー……!!!）

そこで私は弾かれたように初めて周囲を見渡したが、

先程までの光景と全く違う場所だった。

「……は……どこだ？」

こんな場所には妖精国には存在しないはずだ。

ここはまるで知識でのみ知っている魔術師の工房——

「いや、ここは……まさか。わ<sup>別人</sup>た<sup>類史</sup>の<sup>私</sup>工房か……!?」

冷静になりかけていた頭が再び混乱した。

再度落ち着いてきたところで状況を整理する。

――まず間違いなくあの私は死んだはずだ。

あの先の記憶が存在しない以上そうとしか考えられない。

問題は私の私が何故汎人類史、しかも自分の工房にいるのか。

「……異聞帯の私同様、情報のみを継承したという事か？」

元々異聞帯の私は汎人類史の私に情報を継承されて成立していた存在だ。

ならばその逆があったとしてもおかしくはない、が……

「死に際にそのような術式を起動した覚えはない。

何より私自身が異聞帯の私なのだと感じている。」

もしも私が汎人類史の私であるならば

これほどはつきりと異聞帯の私の意識が残っているはずがない。

かつての私にはそのような事はなかったのだから。

「しかしこの肉体は汎人類史の私のものだろう……身体感覚がずいぶん違う。」

そこまで考えたところで継承した記録に

疑似サーヴァントなるものが存在している事を思い出した。

今の私はそれに近い状態なのかもしれない。



だとしても何故こんな事になっているのか確かめる術がない。

「……何が起きてこうなったかは分からないままだが、もうそれはいい。」

それよりも……私はどうすればいいのだ。」

改めて周囲を見渡す。間違いなくここは汎人類史の私の拠点。

つまり私は今、汎人類史のブリテンに存在している事になる。

きつと私の知る妖精は誰一人として居ない。

かつての私と共に旅した仲間達も、女王である私に仕えていた騎士達も。

……バーヴァン・シーも。

同じ名前、もしかしたら同じ姿で存在はしているのだろう。生き方さえも同じかもしれない。

それでも……私の知っている妖精ではない。

もう私が救うべきものは何もない。憎むべき妖精すら、いない。

残っているものがあるとすれば汎人類史の自分が渴望し続けた願い。

ブリテンを私のものに——それも今の私にとっては虚しいものでしかない。

今更こちらのブリテンを支配して何が得られるのか。

このブリテンもどうせ、人理によって滅ぶ運命——

「……そういえば、今はいつだ？」

ここがブリテンであるのは間違いないが、どの時点のブリテンなのだろうか。

汎人類史の自分がここで何をしていたのか思い出そうとしても異聞帯での記憶しか思い出せない。

何も分からずに、困り果てていると。

「……母上。」

その声に思わず後ろを振り返る。

「……モードレット。」

そこには私の知らない私の娘息子がいた。

汎人類史の私が何を血迷ったのか作り上げたアルトリアのコピーだ。

見たところ、まだ完全に成長してはいないらしい。

「キヤメロットに騎士王を見に行くのではなかったのですか。」

その言葉で先程の疑問が解決した。

（なるほど、そういえばそんな事をした記録もあつたな。）

私は自分汎人類史の私が何をしたのかの記録も継承している。

それがどういふ結果になったのかも。

（——アルトリア。遠い世界の私の仇敵。）

記録として知ってはいる。だが私自身の目で見てみたいと思った。

私の知る予言の子とは違う騎士王を。

「……母上？」

返事のない自分を訝しんだのか、怪訝そうな顔をしてモードレッドが呼びかけてくる。

「……ああ、そうでしたね。」

行きましょう、キャメロットに。」

私の知らないブリテン。その王を見に行こう。

私達がキャメロットに着いた時には既にパレードが始まっていた。

「「「アーサー王！アーサー王！」「」」

「我らの王！約束の王！アーサー・ペンドラゴン！」

「ブリテンに平和をもたらしたまえー！」

騎士王とその後ろに続く円卓の騎士達。

それに集う民衆達がみな声を揃えてアーサー王を讃えている。

私達はその集団から少し離れた路地でそれを見ていた。

（……ブリテンに平和を、か。）

その言葉に忌まわしい記憶が蘇る。

（くだらぬ。救われて当然なのだ。と救世主に縋りつく事しかない民。

これだけ讃えておきながら、最後には呪い、罵るのだろう。

ブリテンが滅びたのはお前のせいだ、と。）

お前はそれを分かっている。その道を選んだのか。

人間としての人生を捨てて、ブリテンの救世主となる道を。

そうあれと望まれて生まれた、ただそれだけの理由で。

「あれが騎士王アーサー……」

隣にいるモードレッドが呟いた。

「……そう。あれこそ王の分身たるお前が目指すべき相手。」

「……俺が？アーサー王の……？」

……そういえば今のモードレッドは自分の秘密を知らないのだったか？

先を知っているが故に本来の私とは違う答え方をしてしまったようだ。

まあ、どうせ後で知るのだから今知ったところで何も変わらないだろう。

それにしても……

「作られた人の為の王とはな。まったくもって救われない存在だ。」

「救われない？でも、王はあんなにも——」

「民や騎士は讃えるだろう。救世主たる理想の王を。」

「——だが。」

同類は居らず、逃げ場はない。王を理解する者もない。

何の報酬もなく、ただひたすらブリテンを救い続けなければならない。

無論失敗などただの一つも許されない。」

「……」

「例えばブリテンを何度救ったとしても。」

人は自分とは違う存在を恐れるもの。いずれ感謝を忘れ、石を投げつけるだろう。

そしてうまくいかなかった事があれば何もかもを自分のせいとされるのだ。

お前が悪い、お前が間違えたからだ。そんな存在に救いがあるとでも？」

あるわけがない。

望まれた救世主の末路など、私はこれ以上ないほどに知っている。

「……なら俺が救う。」

「……何？」

思つてもみない言葉に思わず聞き返してしまう。

「俺が彼の剣の切っ先となり、穢れを祓うものになる。俺が理解者になる。

俺が王になるっていう逃げ場だって作つてやる。」

「……そうか。お前がそうしたいのなら別に止めはしない。」

「えっ……？」

何だ、何故そこで固まる。自分で言い出したことだろうに。

「母上は前に、俺はアーサー王を倒さなければならぬって……」

「ん……ああ、そうだったか。それでもいいぞ。」

お前のやりたいようにやるがいい。」

汎人類史の私がアーサー王を倒すためだけに作り出した私の娘。モードレッド

私にその使命を押し付ける資格はない。

どうせ何をしようとするのブリテンは滅びる運命にある。

ならば好きにさせてやろう。

モードレッドはしばらく固まっていたが、不意に顔を綻ばせる。

「じゃあ……じゃあ、俺は騎士になる！」

騎士になつてアーサー王に仕える！」

モードレッドはそう言つて決意を固めたようだ。

……私にはその決意が無駄な事だと分かつていたが。

それを口にする事はなかつた。

その後、騎士となるモードレッドに正体を隠す為の兜を渡し、

正体を誰にも悟られるなどだけ言い含めて、モードレッドをキャメロットへと送り出した。

もう私がこのブリテンに関わる事はない。

私が何をせずとも定められた滅びに向かうだろう。

異聞帯で私を成立させてくれた本来の私の願いを踏み躪るようで心苦しいが

私はその願いがこのブリテンでは決して叶わない事を知っている。

だからせめて。

私が愛したブリテンを私の代わりに見届けよう。

## プロローグ（後）

——結果として。

私の知る記録と同じようにキヤメロットは、円卓は、ブリテンは滅びた。

数々の原因はあれど、決定的な崩壊を招いたのはモードレッドによる叛逆らしい。私はあれ以来モードレッドとは一切関わっていない。

本来の私がやったような呪詛もかけていない。

それでも尚、モードレッドは叛逆する事を選んだ。

何があつたか知らないが、やはりあの決意は無駄になつたようだ。

死体、死体、死体。

もう死体しかない丘を進んでいく。

その先にはモードレッドも同じように転がっていた。

よほど強力な一撃を食らつたのか、鎧も兜も碎けてしまっている。

「……………あ……………は、は、うえ……………」



「……まだ生きていたのか、モードレッド。」

……最後に言いたい事があるなら聞いてやるぞ。」

既にモードレッドの心臓は停止している。

わずかに残っている機能もすぐに停止するだろう。

「おれは……おれのたすけは、いらないうって……言わ、れた……」

「……」

「おれは……なんの、ために……」

何の為に生まれた——

その言葉を最後まで言えないまま、モードレッドの機能が停止した。

汎人類史においての私の子の一人であったモードレッド。

今の私にとっては何の情もない。

ない、のだが……

「……お前はもうその答えを見つけているだろう。」

お前がそう生きるよと決めた時から。」

せめてもの手向けとしてその言葉を送ってやった。

モードレッドを見届けた私はその後、丘の近くにある森に立ち寄った。そこは汎人類史のアルトリアが最期を迎えた場所。

私がある場所にたどり着いた時には一人の騎士が聖剣を携わり、駆けていく姿が見えた。

湖へ聖剣を返還する為だろう。それでアルトリアは完全な死を迎える。

私は一步一步、アルトリアの元へと歩いていくが気付かれた様子はない。

さすがに目の前まで来たところで足音に気付いたのか

アルトリアが顔を上げてこちらを見た。

「つ……………きさ、まは…………!!」

「……………久しいな、アルトリア。我が仇敵であったものよ。」

私だと分かるやいなや、私を睨みつけてくる。

だがもう立ち上がる力すら残っていないのか、睨みつけてくるだけで動こうともしない。

—哀れだな。救世主として都合よく使われ続け、

民も街も国も、全てを立て直したにも関わらず

民にも騎士にも除け者にされて、こうして一人で死んでいく。

それはまるで――

(……………)

かつての自分を思い出し、どうしようもない感情に支配される。

そうだ、認めたくはないがお前と私は似ている。

立場も理由も信念すら違えど、ブリテンの為に全てを捧げ、全てを失った同類だ。

そんなお前だからこそ最後に聞いてみたい事がある。

……いつの間にか私を睨みつけていたはずの瞳に困惑の色が混ざり始めた。

何もしてこない私を警戒しているのだろう。

「安心しろ。何もお前を殺しにきたわけではない。

聞きたい事があるだけだ。」

さらに困惑の気配が強くなるアルトリアを無視して私は問いかけた。

「お前は……後悔していないのか。」

(どうだアーサー王！あなたの国はこれで終わりだ！)

(これがあなたがいらないと言った私の力だ！)

(私ならあなたを救ってあげられたのに！)

(何故私を信じてくれなかった！)

(そんなに魔女の子である俺が憎かったのか!?)

何を言われているのか分からなかった。

私は救いなんて求めていなかったのだから信じるも何も無い。

私を救う暇があるならその力で国を救ってほしかった。

モードレッドと相討ちになる形であの戦いは終わった。

私も終わりが近い。

それを悟った私は最後まで私に従ってくれた騎士に告げる。

「ベディヴィエール、あの血塗られた丘を越えた先にある深い湖に……我が剣を投げ入れよ。」

彼はしばらく迷っていたようだったが、しばらくすると彼の表情からは迷いが消えていた。

そして駆けていった彼を見送ると私はゆっくりと目を閉じた。

今度こそ、聖剣は返還される。私はここで終わるのだ。

聖劍が返還されるまでに残された最後の時間。

動くこともできない私はただ、過去を振り返っていた。

——少し前に見た気がする夢の内容も含めて、全て。

そうして終わりを待つ私に、近付いてくる足音が聞こえた。

まだ聖劍が返還された気配はない。

もしかして聖劍を捨てられずにまた戻ってきてしまったのだろうか。

そう思つて顔を上げると——

「つ……………きさ、まは……………!!」

「……………久しいな、アルトリア。我が仇敵であつたものよ。」

(モルガン……………!)

ブリテンが滅んだ原因の一つであろう我が姉にして魔女。

すぐにも斬り捨てたかつた。だがそうする為の劍はなく、

既に立ち上がる力もない私にできる事は睨みつける事だけだった。

(私を笑いにきたのか、殺しにきたのか……………いずれにせよ、貴様にだけは屈しない。)

せめてもの抵抗に睨み続けていたのだが……………ふと、違和感を覚える。

彼女が私を見る目から感じるものは嘲りでも憎しみでもなく

悲哀や怒り、同情……それら全てが混ざったかのようなものを感じたのだ。

馬鹿な。この魔女が私にそのような感情を向ける理由がない。

今更あなたにそんな目を向けられたところで何も救われない。

（何故……何故あなたがそんな目をする。今更になって、何故！）

「安心しろ。何もお前を殺しにきたわけではない。」

聞きたい事があるだけだ。」

「この魔女が私に？今更何を問おうというのだろうか。」

「お前は……後悔していないのか。」

——。

「聖剣を手放したという事はこの結末を受け入れたと言うことだ。」

「お前は本当にそれでいいのか。」

その問いにどういう意図があったのかは分からない。

ただその言葉だけは何の謀もなく本心から聞いていると思えた。

だから私も偽りのない答えだけを返す。

「……はい。私は後悔していません。」

「……何故。」

「——剣を抜いた時に私は誓ったのです。」

たとえ何もかもを失う事になるのだとしても。私は戦い続けると。」  
「だがその結果はこれだ。」

何か別のやり方があったとは思わないのか。」

「そうかもしれない。ですが。」

私の選んだ道は間違っていないなかつたと信じています。」

「……………そう、か。」

そう言つて寂しそうな彼女があまりにも私の知る姿と違いすぎて。

その気配はすぐに消えたものの、聞かずにはいられなかつた。

「……………あなたは何か後悔をしているのですか？」

「……………」

返答はない。

けれど息を吞んで私を見るその目で答えは分かつた。

「……………私はお前とは違う。」

話は終わりだ。邪魔をしたな。」

彼女はその言葉を最後に踵を返し、去っていく。

その背中はその知る魔女ではなく。

私と同じ孤独な王の背中に見えたのは気のせいだったのだろうか。

(……どうやら、私もここまでのようだな。)

アルトリアの居た場所とは離れた場所、しかし同じ森の中で

私はアルトリアと同じように大きな木によりかかった。

自分が消えていくのが分かる。意識が薄れていくこの感覚には覚えがある。

何の因果か、汎人類史の私と同化していた私だが所詮はただの残滓。

私もまたあるべきところに還るのだろう。

いや、あるべきところなど存在しないのだから消えると言った方が正しいか。

もしかしたらこちらで目覚めてから今までの全ては

あの玉座の間で死にゆく私が見ている泡沫の夢なのかもしれない。

どうせ夢ならもつと気の利いた夢を見せてほしいものだ。

「……ああ、やはり貴様とは分かり合えない。

別に分かり合いたくもないが。」



アルトリアはこの結末を後悔していないと言った。私には受け入れ難い答えだ。私は今でも後悔している。何か他にやり方があったのではないかと。

あのように終わりを受け入れる事など何千年かかってもできそうにない。

やり直す事ができるのならどんな手を使ってもやり直すだろう。

でもそれは不可能だ。私にはその手段も時間も残されていない。

(叶うなら……もう一度……——)

今度こそ私の意識は無へと消えた。

——そのはずだったのだが。

消えたと思っていた意識が再び戻ってきた。

もしやまたなのか、一体どうなっている。

マーリンに無間地獄夢幻のような幻術でもかけられているのか。

そう思つて目を開き、辺りを見渡すと。

「なんだ、ハハハ……!?!」

私が見たものは全てが炎上している崩壊した街。文字通りの地獄だった。

## 炎上汚染都市：冬木

どこを見渡しても燃え盛る炎で赤く染まっている。

一瞬、災厄が訪れた妖精國に戻ってきたのかと思つたが

この街並みはおそらく汎人類史の人間の街だ。

今度こそ継承された記録にすら存在しない見知らぬ場所。

私はどこに行けばいいのか、どうすればいいのかも分からずに街を彷徨っていた。

生きている者でも居れば何かしらの情報を聞き出せたのだが先程から出会うのは――

「また貴様らか。消えるがいい。」

骨のみの生物、スケルトン。

あちこちで遭遇する上にこちらに襲いかかってくる。

私は降りかかる火の粉を払うように手にした杖で薙ぎ払い、消滅させていく。

「……本来なら指先一つで殲滅できるものを。」

ここまで力を失っているとは、我ながら情けない。」

どうやら今度は憑代が存在するわけでもなく、私だけがこの場に召喚されたようだ。

やはり本来の私の肉体はあの時に失われたらしく

残滓のような存在となった私に本来の力は出せず、限られた魔力で戦う事を強いられていた。

幸いにも大気中の魔力は十分に存在しているので、この程度の雑魚を倒すのに困る事はない。

「だがこのままでは埒があかない。一体ここは何だ……！」

どこまでいっても状況は変わらず、さすがに気が滅入ってくる。

ひよつとしたらここは本当に地獄で

私はここで永久に彷徨い続けなければならぬのではないか。

そんな考えまで浮かんできた時、かなり離れた場所で魔力の高まりを感じた。

「これは……何者かが戦闘を行っているのか……？」

ようやく手掛かりになりそうな存在を見つけた。

だが何者かも分からない相手の前に姿を現す事は避けた方がいいだろう。

分身体を作り出せれば手っ取り早く安全に接触できるのだが、今の私にはそれすらできない。

仕方なく離れた場所から視界を強化して覗き見る。

「この私がこのような真似をしなければならぬとは……！」

見つけた。人影が数人。どうやら戦っているようだ。

何者なのかとそちらに意識を集中する。

「な……!? あれは……!?」

見間違いではない。

あれは異邦の魔術師——カルデアのマスター!

その前で戦う盾のサーヴァントにも見覚えがある。

もう一人、知らない魔術師も居るがあれは——いや、それよりも。

奴らが戦っている相手は……

「あれは……村正なるサーヴァントと共にいたキャスターか。

何故奴らが戦っている。」

奴らは仲間だったはずだ。あのように争う理由などないはずだが。

それにしても少々違和感を感じる。

私と対峙したあのマスターとサーヴァントはあそこまで弱々しい存在だっただろうか。

か。

あのキャスターからの攻撃を防ぎ続けてマスターを守っているがあれでは護りきれない。

防ぎきれないと判断したのか宝具を展開して攻撃を防いだ、が——

「……なんだあの宝具は？」

私との戦闘で見せた白亜の城の護りではない。

まるで本来の力を封印されているかのような——

「まさか……ここは……」

私の知る姿よりも明らかに弱く、戦闘経験の少ない姿。

今奴らが戦っているこの場所はカルデアが妖精國に来るよりも遙か前の出来事なのだ。

奴らが焼却された人理を修復し、異聞帯を消滅させる旅をした事は知っている。

その旅路のどこかなのだろう。

ならば——ならば。

(このまま時が進めば奴らは再び妖精國へと足を踏み入れる——?)

私が作り上げたブリテン。

もし今はまだ存在しないのだとしても、いずれ地表へと顕現する。

そうすれば——会える。会える。もう一度会える。

久しく感じる事のなかつた感情を抑えきれずに口元を抑える。

……落ち着くまでに時間がかかってしまったが、その間に奴らの戦いも終わって

た。

よく分からないが、どうもあの雰囲気からして模擬戦でも行っていたようだ。私はどうするべきなのか。

このまま事が終われば奴らはカルデアへと帰還してしまうだろう。そうなればここに残された私はまた消えてしまうかもしれない。

だからと言って奴らに協力するというのも憚られる。

奴らがいなければ私がブリテンを失う事もなかったというのに。

ましてやこの私が汎人類史を守る為に戦うなど、腸が煮えくり返りそうだ。

それ以外に何かいい方法は……

(……いえ、考えるまでもない事でしたね。)

既に私は一度全てを失っている。

その時になってようやく本当に大切なものに気付いたのだ。

彼女の為なら私の矜持なんてどうでもいい。

そう思つてカルデアに接触する事を決めた私だったが――

(……困りましたね。どのように接触すればいいのでしょうか。)

いざその時になって前に進めずにいた。

カルデアとは以前わずかな対話をしたのみで奴らの事をあまりよく知らない。

そもそも接触したとして、得体の知れない私を信用するとは思えない。

信用を得る為の手段も情報も持ち合わせていない。

どうやって信用を得るべきか……

(見たところあのマスターもサーヴァントも、まだまだ発展途上といったところ。

この先の戦闘で苦戦する事もあるだろう。

その際に助力をして信用を得る……うん、これでいきましょう。)

エクターが居たら短絡的すぎると言われただろうが、ここに私を止める者は居ない。

私は気付かれないように離れた場所から監視を続けて後をつける事にした。

その後はしばらくの間、特に大した戦闘もなく順調に進んでいた。

一行は洞窟のような場所へと入っていく。

私もしばらくしてから隠形を施し、洞窟へと足を踏み入れる。

(……は……長い年月をかけて作られた魔術師の工房か。)

神秘の薄れた時代にここまでの工房を作り上げるとはなかなかのものだ。



それに最奥から感じるこの魔力……これは――

奥に進むとアーチャーと思われるサーヴァントが現れ、

カルデアと戦闘を行っていたが、あまり苦戦する事もなく突破してしまった。

このままでは私が乱入する口実がなくなってしまう。

全てが終わる前に姿を現してしまおうか……そう考えていた時。

最奥で戦闘の始まった気配がした。

戦闘中なら気付かれにくいと踏んで、私も最奥まで移動する。

そこで私は信じられないものを目にした。

(あれは……アルトリアか!?)

黒い何かで変質してはいるが間違いなくあれはアルトリアだ。

同じように黒く染まった聖剣を構え、魔力を高めている。

宝具の真名を解放して攻撃するつもりなのだろう。

シールドもそれを察知して盾を構え、宝具で防ぐつもりのようなだ。

「約束された勝利の剣!」

「疑似展開／人理の礎!」

……

……?

聞き間違いだろうか？いや、そうに決まっている。

とりあえず結果はシールダーが防衛に成功したようだ。

その後、反撃とばかりに二人がかりでアルトリアに攻撃しているが

キヤスターと経験の浅いシールダーでは足りないのか、苦戦している。

しばらくしてアルトリアが再び宝具を解放する構えをとった。

シールダーも再び盾を構える。

「約束された勝利の剣！」  
エクスカリバー・モルガン

「疑似展開／人理の礎！」  
ロード・カルデアス

……聞き間違いではなかったようだ。

何だその宝具の真名は？

黒く染まったエクスカリバーに私の名を付け足す事に何の意味がある？

もしや私への嫌がらせか？嫌がらせなのか？

間髪入れず、アルトリアが宝具の構えを取る。

聖杯からの供給を受けているらしいアルトリアに魔力切れはない。

カルデア側は宝具の連発の気配に慌てふためいている。

おそらく魔力が足りず、今度は防ぐ手段が間に合わないのだろう。

……ちようどいい。こんな嫌がらせを受けては私も黙ってられない。

「約束された勝利の剣！」  
エクスカリバー・モルガン

「私を呼んだか？アルトリア。」

「つ……………!?!」

「はや辿り着けぬ理想郷！」  
ロードレウス・キャメロット

極光を私の作り上げた路が飲み込み、極光諸共破壊する。

突然の乱入者にこちらを見て呆然とするカルデアの連中と  
目を見開いて固まっているアルトリアの前に姿を現す。

『サーヴァント反応、確認！バーサーカーだ！』

キヤスター、彼女が君の言っていた怪物のバーサーカーかい!?!』

「いや、違い！バーサーカーはこの女じゃねえ。」

「そもそも本来七騎の中には居なかったはずだ！」

「じゃああのサーヴァントは一体何なの!?! 新手だなんて聞いてないわよ！」

「し、しかし今彼女は明らかに私達を助けてくれました！」

「味方なのではないでしょうか？」

「ずいぶんと騒がしい連中だ。」

「私はカルデアを無視してアルトリアと対峙する。」

「馬鹿な……………何故、貴様がここに居る……………!?!」

「呼ばれたから来てやったと言うのに、ずいぶんな言われようだな。」

「なんだ!? テメエ、このサーヴァントを知ってやがるのか!？」

まさかテメエ、聖杯で新しいサーヴァントを召喚したとかじゃないだろうな!？」

私がアルトリアに呼ばれたというのを真に受けたのか、

キャスターがアルトリアに向かって叫んでいる。

「違う。私がこの女を召喚する事などあるものか。」

知己であるのは認めよう。憎むべき敵としてのな。

そうだろう、我が姉にして我が仇敵……モルガン!」

『モルガンだって!? イグレインがウーサー王に嫁いだから産まれた

アーサー王に敵対していた悪女として語られているあのモルガンかい!？」

どこからともなく聞こえてくる軟弱そうな男の声。

何故か腹立たしい気分になる。カルデアからの通信魔術だろうか。

「……まあ、そうですね。」

私はアーサー王の仇敵として世界を滅ぼした魔女。<sup>ブリテン</sup>

それで問題がないのなら、サーヴァントとして力を貸しましょう。」

『そ、それはありがたい事だけど……いや、ありがたい事ですけど……』

「……今更畏まる必要はありません。」

生前ならまだしも、今の私はただの残滓。」

『……では、我々がアーサー王を倒す事に協力していただけると?』

「ええ、とりあえずはあなた達に助力しましょう。」

そのアルトリアは私にとつても倒さねばならぬ敵ですの。」

カルデアの行く手を阻むという事は私の目的を阻むという事に等しい。

ならばそれは私の敵である。

「どういふ風の吹き回しだ。貴様が人理を守る側に立つたど?」

「貴様こそ何かの冗談か?」

人理に従つて終わる事を受け入れた貴様が今更、人理を壊す側に立つと言うのか?」

「……………そうか、あなたはあの時の…………」

呟くような声が聞こえたが、何を言ったのかは聞き取れなかった。

「いいだろう、構えるがいいモルガン<sup>我が姉</sup>!」

その言葉が真実かどうか、この剣で確かめてやろう!」

これ以上話す事はないとばかりに、アルトリアが再び剣を構えた。

『ともかくこれで勝利できる可能性が上がった!』

マシユ、今の内に魔力を! 少しずつなら回復できるはずだ!

その間に、彼女達の援護を——』

「約束エされたス——」

「させるものか。」

アルトリアに宝具を使わせる隙は与えない。

先程は不意をついた事で止める事が出来たが、また連発されれば私でも止めきれない。  
い。

今の私では奴を止めるほどの威力の魔術を使う事も難しい。

となれば止める手段はこれだけだ。

杖を槍として扱い、アルトリアの動きを物理的に止め続ける。

『ちよつ!?あのアーサー王と白兵戦だつて!?しかも互角!』

どうなつてるんだ!?本来はキャスターであろう彼女が

バーサーカーになつている事と何か関係があるのか!』

無論、まともに打ち合えば私がアルトリアに勝てる道理はない。

魔術で身体と武器を強化して誤魔化しているにすぎない。

このまま戦い続けければ先に限界を迎えるのは私の方だ。

これが一騎打ちであれば数分もたず敗北しているだろう。

だが今は私以外にも攻撃を仕掛けている者がいる。キャスターだ。

私が反撃を受けそうになる度に、それを潰してくれている。

そのおかげで何とか互角の状態に持ち込んでいる。

このままでは埒があかないと判断したのか、

アルトリアは魔力放出により後方へ飛んで距離をとった。

そこで再び宝具を撃つつもりのようなのだ。

『まずいぞ、宝具が飛んでくる！あれはもう止められない！』

「……さて、時間は稼ぎました。」

シールダー、後一度だけ宝具を展開するだけの魔力はありますか？」

「……はい！仮想宝具、展開可能です！」

「ではもう一度だけその護りを。後は私が仕留めましょう。」

「分かりました！」

「約束された勝利の剣！」  
エクスカリバー・モルガン

放たれた黒き極光が再び迫ってくる。

「疑似展開／ロード・カルクデアス人理の礎！」

シールダーが残された魔力で宝具を展開し、黒き極光を凌ぐ。

それを予想していたのかアルトリアは既にもう一度宝具を放とうとしていた。

だがそれを予想していたのはこちらも同じ事。

「はや辿り着けぬ理想郷！」  
ロード・レス・キアメロット

「っ……!!」

奴が二度目の宝具を放つよりも前に私の発動した宝具がアルトリアを襲う。宝具で迎撃しようとしたようだがもう遅い。

私の宝具の光がアルトリアを飲み込み奴の霊基を破壊していった。

「……聖杯を守り通す気でいたが、敗北してしまったか。

結局、どう運命が変わろうと私ひとりでは同じ末路を迎えるという事か。」

何かを知っているかのような口調だ。

キヤスターもそれが気になったのかアルトリアを問いただしている。

「いずれ貴方も知る、アイルランドの光の御子よ。……そして姉上。

——聖杯を巡る戦いは、まだ始まったばかりだという事を見な。」

そう言い残して最後にアルトリアはこちらを見た。

何かを言おうとしていたようだがそれが言葉になる前に奴は消滅した。

直後にキヤスターも強制帰還により消滅した。

残されたのは私とカルデアの連中だけとなり、



カルデアは全て終わったと言わなければかりの雰囲気だ。

そこに一人の男が現れた。

その男はレフと言うらしい魔術師——私には人間に見えなかったが。

男は私には興味を示さず、カルデアとの話に集中している。

話を聞いている限りではまさに今、人理焼却が行われたところらしい。

奴らの旅はここから始まったと言う事か。

そしてその男によつてカルデアの魔術師が一人、天球に吸い寄せられて消滅した。

そうしている内にこの特異点も限界を迎えたのか地下空洞が崩れ始めた。

レフという男は消え、シールダーが慌てて通信先の魔術師に指示を出している。

崩壊する前にレイシフトを実行して脱出するつもりのようなのだ。

マスターとシールダーが意識を強く持つ為か、互いに手を取り合う。

「えつと……モルガンさんは……！」

「私の事は気にせずとも結構。あなた達は自分の心配をするように。」

私の言葉に反応するよりも先に、二人の輪郭が薄れて消えていく。

残された私もこのままではこの空間と共に消えるだろう。

だけどそれは認めない。せつかく手にした最後の可能性。

それをここで諦められるものか。

(上手くいくかは賭けですが……やるしかないですね。)

レイシフト——その魔術理論は既に理解している。

私はその術式を解析し、かつてこちらの私がやったようにそれを実行した——

「それで、君は何しにこちらに来たのかね？」

いや、というよりもどうやって来たのかな？」

カルデアに侵入した私を出迎えたのはダヴィンチと言う名のサーヴァント。

妖精國で見た時の嬰兒とは違うようだが、その辺りに興味はない。

「帰還していく二人に施された術式を解明して実行し、追跡しました。」

「あの短時間でレイシフトの術式を解析したと言うのかい!？」

まさに神域の天才と言ってもいい、恐ろしいな！」

「(こちらに来た理由は特にありません。」

訳も分からず召喚されたまま、消えるのも癪でしたので。

しばらく此処で過ごしたいのですが、構いませんか？」

半分本当で半分嘘だ。

あのまま消えたくないというのは本当だがそれだけではない。

カルデアには人理を修復してもらわねばならない。

私が求めているのはその先の――

「ううん、正直経歴が経歴だけにあまり信用できないんだけど……」

「ではどうします？不安ならば私を消しておきますか？」

「いやいや、そんな恐れ多い事できやしないさ。」

それに今は一人でも戦力が欲しいところだ。

経歴だけで信用できない、なんて言っていられない。

もちろん、本当に怪しいと思ったら全力で排除させてもらうけどね。」

「……分かりました。」

人理修復を成すまではあなた達の邪魔は決してしないと誓いましょう。」

「んー、何かイメージと違うけど……まあいいか！

これからよろしく頼むでしょう！」

「ええ、こちらこそ。」

互いに心中を探り合うかのような問答を行ったが私には意味のないものだ。

こちらでも大幅に機能を失ってしまっているが妖精眼が残っている。

とりあえず最低限の信頼は得たようだ。

（ああ、邪魔は決してしないと。）

お前達には私の國へと来てもらわなければならぬのだから。）

その時までカルデアのサーヴァントとしてあり続けよう。

そう決意した私は、とりあえずマスターとなるべき存在に挨拶に行くことにした。

——どこに居るのか分からなかった。

## 挨拶と契約

先日はどうやらカルデアのマスターの意識がまだ戻っていなかったらしい。休息も必要だろうから待っていてほしい、と空いていた部屋をあてがわれた。後日改めて管制室へと呼び出され、マスター達と会う事になった。

慣れない場所で辿り着くの時間に時間がかかってしまったが。

管制室へと足を踏み入れた私を見てマスターとシールドは驚いた顔をする。

その隣には先日私を出迎えたサーヴァントと……

「やあ、やっと来てくれたんだね。」

遅いからもしかしたら来てくれないのかと思ったよ。」

私を見るなり、その男にそう言われてつい言い返してしまう。

「道案内もよこさずに呼び出しただけしておいて、よくも言えたものですね。」

私はこの施設の構造をあまりよく知らないのですよ?」

「あ、ああ……それは済まない事をしたね。謝るよ。」

あの部屋からはほとんど一本道なのに迷うとは思わないじゃないか……」

「何か?」

「いやあ、別に何も！何も言っていないよ！」

「ドクター、その人はもしかして……」

私が男を睨みつけていると、隣から声が聞こえてきた。

「ああ、ごめんごめん。君達に会わせなかったのは彼女の事さ。

あの特異点で君達を助けてくれた彼女もカルデアに来てくれたんだ。」

「やっぱりそうだったんですね。私はマシユ・キリエライトと言います。

デミ・サーヴァントです。真名はまだ分かりません。

モルガンさんと仰られるのですよね？これからよろしくお願いします。」

マシユ・キリエライト。

天上の騎士ギヤラハツドの霊基を持つサーヴァント。

そう記憶している。

「マシユ。はい、覚えました。

こちらこそよろしくお願いしますね。」

そしてその隣にいるのが……

「私は藤丸 立香です。あの時はありがとうございます。

モルガンさん、でいいのかな。よろしくね。」

緊張しているのか、どことなく口調が硬い。

「藤丸、立香……覚えてました。ええ、こちらこそ。

それから私の事はモルガンと呼んで結構ですよ。」

カルデアのマスター。人類最後のマスターである少女。

私の知る彼女とは雰囲気はかなり違っている。

「そういえば僕の紹介もまだだった。

僕はロマニ・アーキマン。皆からはドクターロマンと呼ばれているよ。

彼女達のサポートを行っているんだ。よろしく。」

「……」

「……あれ、何か僕だけ睨まれてる？何か変な事言ったかな……？」

やはりこの男、カルデアの者と名乗ったあの男によく似ている。

しかしおそらくは別人であろう事も何となく分かった。

無関係ではないだろうが、今この男を問い詰めても何も得るものはなさそうだ。

「……いえ、軟弱そうな男だなと思っただけです。」

「わざわざ言わなくてもいいんじゃないかな?!

うう……僕だって頑張ってるのになあ……」

私は項垂れる男を無視して改めて立香とマシユを見る。

見られている事に気付いた二人が会釈を返してきた。

私にとっては過去の事だが、いずれ私と対峙する二人。

その二人と私がこうしている事にとっても奇妙なものを感じる。

「いやあ、それにしても驚いたよ。

冬木から帰還したマシユと立香ちゃんの意識がなかなか戻らないから

二人を医務室に運び出した辺りで急に彼女が現れたんだ。」

「ロマニつたらひどいんだぜ？」

対応を私一人に押し付けて自分たちはさつきと後方待機さ。」

「うっ……だってしようがないじゃないか！彼女はサーヴァントだよ!？」

何かあった時は同じサーヴァントである君しか対処できないんだから!？」

「えっ……急に現れたというのはどういう事でしょう……?？」

マシユが驚いたような顔をして疑問を投げかける。

「聞いて驚くなよ二人とも。」

なんと彼女は君達が帰還する際に発動した術式を解析して

自力でこちらにレイシフトしてきたんだ。」

「え……ええ!?!そんな事が可能なのですか!?!」

「もちろん通常なら不可能だとも!」



彼女は我々の想像を超える天才だった、としか言いようがないね。」

「へー、やっぱりすごい人なんですね。」

立香はあまりよく分かっていないのか

興奮気味の三人とは違って普通に感心している。

その後しばらく軽い雑談を交わし、

これからのカルデアがするべき事やこの施設の説明などを聞かされた。

「さて、ボクたちカルデアの事情はこんなところかな。

それを踏まえた上であなたに一つだけ確認したい。」

ロマニ・アーキマンが先程までとは

うってかわって真面目な顔でこちらに向き合ってくる。

「今の僕たちにはあまりに力がない。

あなたがこちらに来た理由はこの際何でも構わない。

我々カルデアはあなたを受け入れる代わりに、協力を要請したいと思います。」

「……構いませんよ。ここに来た時点でそれは半ば承知の上です。」

「本当かい!?それは助かる！」

あなたを説得するのは骨が折れそうだなあと思ってたんだけど

まさかこんなにあっさり了承してくれるなんて。」

真面目かと思えばすぐに元の剽軽な雰囲気に戻る。掴めない男だ。

「さて、そうとなれば立香ちゃん、君にも頼みがある。

彼女——モルガンとサーヴァントの契約を交わしてもらいたいんだ。」

「えっ?」

「彼女は僕たちに協力すると言ってくれた。

でも彼女はまだマスターを持たないサーヴァントだ。

このままでは君達のように各時代にはそうそう跳んでいけない。

だけど立香ちゃんが彼女と正式に契約できたのなら話は別だ。

マスターが存在すれば安定して同じ時代にレイシフトする事が可能になる。」

唐突な提案に面食らったのか、彼女はこちらをチラチラと見ながら考え込む。

「……いいのかな。」

私なんかがこんなすごい人のマスターになって。」

「おや、やはり私のような悪い魔女と契約などしたくはありませんか?」

そう言つて意地悪く微笑むと慌てたように否定してきた。

「いやいや、そういう訳じゃないけど……!」

その、モルガンはいいの? 私なんかマスターになって。」

まだ自信がないのか、決断できずにいるようだ。

その姿は私の知る彼女の姿とあまりにかけ離れていた。

一体どれだけの困難を乗り越えればあのようになるのだろうか。

「私は協力すると言った時からそのつもりですよ。」

あなたはあの戦場でアルトリアと対峙し、勝利した。

それだけで十分戦果はあると思いますが？」

彼女はしばらく考えて、やがて迷うのをやめたのか、

「分かった、契約する。」

まっすぐな瞳でこちらを見てそう言った。

そして契約の詠唱を口にする。

「……あなたを我が主として認めましょう、藤丸立香。」

これより私はあなたのサーヴァントです。

おまえには私の臣下としての働きを期待していますよ。」

「……あれ？私がマスターなんだよね？臣下扱いなの？」

「臣下が嫌なら下僕か奴隷でもいいですよ？」

「臣下でお願いします。」

「ははは。それもマスターとサーヴァントの関係の一つだね。」

たつぷりこきつかつてもらうといいよ！」

「もう、ドクターは他人事だと思つて！」

ぎやあぎやあと言い合いをしているマスター達の横から

ダ・ヴィンチが近寄つて話しかけてくる。

「正直、協力してくれるとまでは思つていなかったよ。

特異点でアーサー王も言つていたけど君は本来人理を守る義理なんてないはずだからね。」

むしろ憎む側でもおかしくない。」

「……間違つてはいません。」

私は今でも……人類史を呪い続けています。」

「それでも我々に協力してくれるんだね？理由を聞いても？」

「……気紛れ、とでも言つておきましょう。」

そんな移り気な私にあまり触れると気が変わるかもしれないよ？」

「おっと、藪蛇だったかな。それは困る。」

まあ君に悪意がないのは何となく伝わったからそれでよしとするよ。」

ダヴィンチはそう言つてあっさり引き下がつていった。

そうしている内にあちらの話も終わったようだ。

「さて、みんなに伝えたかった話は大体伝えたかな。

特異点を発見次第、君達にはレイシフトでその時代に行ってもらおう事になる。

特定にはしばらく時間がかかるからその間、君達は色々準備しておいてほしい。」

話が終わるとすぐにダヴィンチは自分の工房に。マシユは調整があると離れていく。

マスターもやる事が多すぎて大変と言いながら部屋へと戻っていった。

とりあえず私も部屋に戻るとしよう。

「一応言っておくけど、君の部屋はそっちの方向じゃないよ？」

「……分かっています。少し施設を見ておこうと思っただけです。」

## 騎士王召喚

あれから数日経過したが、特異点の特定はまだできていないらしい。今日は召喚システムの試用も兼ねて英霊の召喚を行うと聞いている。

成功するのかどうかはまだ分からないとの事だったが、

成功すればカルデアの戦力を増やす事ができる。

どんな英霊が来るのかは知らないが、顔ぐらいは見ておこうと立ち寄った。

「やあ、君も来たんだね。もうすぐ準備が終わるところだ。

少しだけ待っていてくれないかな。」

ロマニ・アーキマンがそう言いながら、あちこちの計器をチェックしている。

隣にはマスターとマシユの二人も待機している。

「それにしても一体どんな人が来てくれるのかな。

私、英雄って言われる人達の事あんまりよく知らないんだよね。」

「先輩、それでしたら妖精情報誌<sup>ヴィイヴィアン</sup>を読むのがオススメですよ。

有名な方なら大体載っています。」

「……………マシユ。その本について後で詳しく。」

「あ、モルガンさんも興味がありますか？ 図書室にありますので後でご案内します。」

「よし、準備OKだ。それじゃあマシユ、召喚サークルの設置をお願いするよ。」

準備が整ったらしく、マスターが召喚の詠唱を行う。

直後、召喚サークルから凄まじい光が溢れ、そこに一人の英霊の姿があった。

「問おう。あなたが私のマスターか。」

……………

「は、はい！ あなたは……………冬木で会ったアーサー王!？」

「む。以前に私と会った事があるのですか。」

「あれ？ そういえば何か違う気が。」

「残念ですがその私とこの私は別人です。」

どうやら、並々ならぬ事情がある様子ですね。

話を聞かせてもらいたいところなのですが……………」

カルデアの事情はマスター達に説明させておけばいいだろう。

わざわざ奴に関わる必要はない。そう思っただけを返した私の後ろから声が聞こえてくる。

「それよりも——彼女は？」

「……明らかに私に向けて放たれた声がして足を止めてしまった。

「あつ、ああー……彼女は、えつと……」

アーキマンがどう説明するべきか迷っているようだ。

おそらく私とアルトリアの関係を考えているのだろう。

このまま無視して出て行ってもいいのだが——

「……………」

何も言わずにゆっくりと後ろを振り向く。

目が合った瞬間、アルトリアが目を見開いてこちらを凝視しながら剣に手をかけた。

「あなたはっ……!?!」

「す、ストップ！ストトップ！」

アーキマンが慌てて静止の声を上げているが効果は薄いようだ。

アルトリアは剣に手をかけたまま、こちらを睨みつけている。

私もまたアルトリアから目を離さなかつたので睨みあう形となった。

一触即発の空気に誰も声を上げない中、アルトリアが剣を下げて先に口を開いた。

「……失礼しました。今の私は一騎のサーヴァント。

まずは事情をお聞かせください。」



その言葉に周囲から安堵のため息が聞こえてきた。

「はあ……よかった。こんなところで戦闘が起きたらどうしようかと思つたよ……」

一応は落ち着いたらしいアルトリアにアーキマンが事情の説明を始めた。

「……なるほど。そんな事があつたのですね。」

一通りの説明を聞いたアルトリアは目を閉じて思案しはじめる。

しばらく考えた後、こちらを見て言い放つた。

「……分かりました。マスターが彼女の事を信じるというのなら私もそれに従いますよ。」

その言葉を聞いてマスターも安堵したようでほっと胸をなでおろしている。

だがアルトリアの言葉はそこで終わらなかつた。

「ですが。そう簡単に割り切る事も難しい。」

なので、この場で一度だけ彼女と戦闘を行う許可をいただけませんか？」

「いやいや！全然分かつてくれないじゃないか!？」

アーキマンが再び慌てはじめたが、アルトリアはそれを否定するように首を振つた。  
「何も殺し合いをするわけではありません。これは私なりのケジメです。」

生前の遺恨を残したままにするよりは、解消しておきたいと思ひまして。」

「……一発殴らないと気が済まないから、とりあえず二人で殴り合うって事？」  
「はい、まあ、そういう事です。」

マスターも若干混乱しているようで、複雑そうな顔をしている。

私もまさかそんな提案をしてくるとは思わなかった。

関わりたくもないであろう私の事など居ないものとして扱うと思っていたのだが。

「……はあ、参ったなあ。」

そこまで言われてしまうと僕たちが口を挟めるような問題じゃない。

モルガン、君はどうなんだい？同意があるなら許可を出すのも吝かじゃないけど。」

「……ふむ、要するにアルトリアを力づくで黙らせろと言う事ですな。」

そういう事ならばこちらも遠慮なくやらせてもらいましょう。

私とて、思うところがないわけではないので。」

私からブリテンを奪ったという憎悪は今も私の中に残っている。

こちらから仕掛けるつもりはなかったが、向こうから来るのならば話は別だ。

「はあ……仕方ないなあ。僕たちには止められそうにないし。」

シミュレーターで短時間なら戦闘の許可を出すよ。」

アーキマンに連れられてシミュレーターがあるという部屋へと案内された。

「ここならある程度の戦闘なら問題ないはずさ。

ただし宝具の使用はお互い一度までにしてほしい。

魔力も無駄にはできないからね。」

「ありがとうございます。それで十分です。」

アーキマンが手元の機械を弄ると辺りの風景が一変した。

転移したわけではない——よく分からないが、これがシミュレーターとやらの効果なのだろう。

「では——いきますー！」

言うが早いか魔力放出でこちらに突っ込んできた。猪かこいつは。

だが魔力放出の動きはあの特異点のアルトリアで経験済みだ。私はそれを槍で受け止める。

「なっ——」

「懐に潜り込めば切り伏せられるとも思ったか？」

不意をついた一撃が止められた動揺で焦っているのか追撃はない。

その隙に魔術で反撃してやれば、それを躲す為か自分から距離を離れた。

再び接近される前に魔術を行ってアルトリアに攻撃を行う。

宝具を一度のみと制限されている今の奴ならば接近される事を牽制するだけで十分。

長期戦になれば私が不利になるだけだ。さっさと決着をつけてやろう。

「モルゴース。」

目晦ましを兼ねた漆黒の波を放ち、宝具を解放する為の魔力を高めていく。

アルトリアも私が宝具を撃つつもりだと気付いたのか、

私の攻撃が当たる事も構わずに聖剣を構えた。

「ロドレステス キャメロットはや辿り着けぬ理想郷!」

「エックス スカリア約束された勝利の剣!」

——私とモルガン、互いの宝具がぶつかり合つて相殺された。

短い戦闘だったものの、もうこれ以上の戦闘は必要ない。確かめたい事は確かめた。

私が剣を収めると、あちらも魔術の行使をやめた。

「……………ここまでで結構です。」

マスター、私の我儘に付き合っていたき、ありがとうございました。」

マスター達の方に向き直り、礼を言う私にマスターは笑顔で返してくれた。

「私はこれで二人の気が済むなら全然気にしてないよ。」

「それで、とりあえず当面の決着はついたと思っただけなのかい?」

勝手な我儘を通したというのにまるで気にした風もなく、私達の事を気にしてくれている。

「どうやらないマスター達に巡り合えたらいい。」

「……はい。」

モルガン<sup>姉上</sup>。あなたからは私に対する殺意を感じなかった。

……ひとまずはこのカルデアに居るあなたを信用する事にします。」

「ひよつとしてアルトリアさんは、最初からそのつもりで戦闘を……？」

「それはそれ、これはこれです。」

出会ったら一発殴りたかったというのもまた事実ですから。」

「……それで？ 気は済んだか？」

私に試されていた事に気が付いたのか、面白くなさそうな顔で睨みつけてきた。

「ええ。あなたを信頼する事は出来ませんが、敵対はしないという言葉は信じましょう。」

「お前に信用してもらおう必要などない。用が済んだのなら私は戻らせてもらう。」

それだけ言い放つと今度こそ去って行ってしまった。

……やはり私の知っている彼女<sup>モルガン</sup>とは少し印象が違う。

彼女が私の知る魔女<sup>モルガン</sup>であるなら、マスターが何と言おうと警告を続けるつもりだっ

た。

だけど今の彼女は私の知っている危険な要素が薄れている気配を感じた。まるで——そう、私の死の間際に問いを投げかけてきた時のような……

召喚された時、私に背を向けて部屋を出ようとしていた姿が

あの時の去つていく姿と重なり、つい声をかけてしまった。  
彼女に何があつたのかは分からない。

かつては互いに互いを否定しあう仇敵で、今は同じマスターを持つ者同士。

今更手を取り合う事は難しくとも、少しだけなら彼女の事を信じてもいいと思えた。

「しかし……まさか私の攻撃が止められてしまうとは。

一発も殴れませんでしたね。それだけは残念です……」

勝負そのものに負けた訳ではないので、同じような機会があれば今度こそ。

この後、新たな英霊を召喚すると言うマスター達に立ち会い

私の知る英霊が召喚された事に、私は驚く事になった。

「アルトリアめ……私を試すとは。」

戦う前から私に対して警戒と困惑の感情を抱いているのは分かっていたが

大幅に機能を失った妖精眼では、それ以上は分からなかった。

「奴を叩き潰すいい機会だと思つたが。全く、どこまでも腹立たしい……」

とは言え、勝負そのものに負けた訳ではない。

次に機会があれば今度こそ完膚なきまでに叩き潰してやろう。

あの後、アルトリア以外にも英霊の召喚を行ったらしい。

特異点で戦つたアーチャーとカルデアに協力していたキャスターが召喚されたようだ。

いや、キャスターではなくランサーだったか。その者達とも、顔を合わせて話を済ませた。

クー・フリーンは何故か私を必要以上に警戒していたが。

どうも性質の悪い女神に付き纏われたことがあるらしい。それと私に何の関係があるのか。

私であれば私を振つた戦士など、死ぬまで付き纏つて呪つてやるだけだと言つてやると

その場に居合わせたマスターとアルトリアが引き攣つた顔で引いていた。

## 邪竜百年戦争オルレアン（1）

アルトリアが召喚されてからしばらくして、特異点がいくつか観測できたらしい。

まずは観測された特異点の中で揺らぎの小さな時代を選んだとの事だ。

そこに向かうのはマスターとマシユ。そしてこの私と……

「では参りましょう、マスター。」

アルトリアだ。この人選に嫌がらせかとアーキマンに問い詰めたが

私が同行する予定だと知り、自分も同行させてほしいと言いつ出したらしい。

信用ならない私を見張るつもりだろうか。

「時間軸の座標は1431年のフランス。」

百年戦争がちょうど休止期間になっている時期のはずだ。

けれどそこが特異点になっていると言う事は——」

「……その戦争が休止されていない可能性がある、という事ですか。」

「その通り。あくまで可能性の話だけだね。」

どうなっているのかは実際に調査してきてもらうしかない。



歪められた歴史を元の形に戻した上で

その時代に存在するであろう聖杯を回収するか破壊すれば任務成功だ。」

「それじゃあ皆、コフィンに入ってくれるかな。」

後はこちらでレイシフトの準備を進めるよ。」

ダヴィンチに促されるまま、各々がコフィンへと入っていく。

しばらくすると術式が起動したらしく、意識が一瞬消える感覚に陥った。

カルデアのレイシフトは初めての経験だったが、どうやら何事もなく成功したようだ。

私の周囲にはマスターとマッシュ、アルトリアの姿がある。

「……………ふう。どうやら無事に転移できたみたいですが、先輩。」

「よかった、初めてだから不安だったんだ。」

「前は事故による転移でしたが、今回はコフィンによる正常な転移ですから……………」

モルガンさんとアルトリアさんも無事にレイシフトできているようです。」

「これがレイシフトというものですか。」

まるでこの時代に召喚されたかのような感覚です。すごい技術ですね。」

アルトリアが感心している。私も面白い魔術理論だとは思っている。

ふと見ると、辺りを見回していたマスターとマシユが空を見上げていた。

何を見ているのかと私も空を見上げたところでアーキマンの声が聞こえてくる。

『よし、回線が繋がった！どうやら全員成功したみたいだね。』

ちよつと画像が荒いけどちやんと映像も送れてるみたいだ。

……つてどうしたんだいみんな？揃って空を見上げちやつたりして。』

「ドクター、映像を送ります。あれは、何ですか？」

『これは——光の輪……いや、衛星軌道上に展開した何らかの魔術式か……？』

モルガン。魔術に詳しい君ならあれが何なのか分かるかい？』

「……いえ、私にもあれの正体が何なのかは分かりません。」

しかしあの光は……聖剣の光が幾億も収束しているかのような……」

聖剣の光という言葉にアルトリアが反応してムツとした表情で空を見上げている。

例えで言っただけで別にそれ以外の意図はなかったのだが。

『まああの光はこちらで解析しておくよ。』

それより、現地の方であの光以外に違和感のあるところはないかい？』

「うーん、この近くにあるのはあの砦くらいしかないけど……」

「先輩、あの砦……かなりポロポロです。今は戦争も休戦しているはずなのに……」

『何だつて？……やはり戦争が今も続いているのかもしれない。』

その辺りにいる兵士に接触をとって情報を集めてみよう。』

それから敵兵だと勘違いされて襲われる事になったが、  
ほどなくして誤解は解け、情報を聞き出す事が出来た。

戦争は休止どころか既に終わっているらしく敵軍は既に撤退していたようだ。

では一体何に襲われたのかというと、どうやら数日前に処刑されたはずの

ジャンヌ・ダルクが竜の魔女となって蘇り、殺戮を行っているらしい。

「ジャンヌ・ダルク……名は知っていますが、そのような逸話は聞いた事がありませんね。」

「ジャンヌ・ダルクって言うと……」

マスターはあまりよく知らないらしく、マシユが彼女の逸話を簡単に説明していた。

「——と言った方です。無力な少女の想いが世界を変えた……」

その例で言うのならジャンヌ・ダルクは最高級の英霊です。」

「でも魔女になって復活したなんて話はないんだよね？」

「はい。そのような逸話は残っていません。」

四百年後には名誉回復が行われ、正式な聖人として認定されています。」

「……ならば考えられる可能性は一つ。

その竜の魔女と呼称されたジャンヌ・ダルクはサーヴァントとして召喚された存在でしょう。」

『……なるほど、ありえない話じゃない。そこは聖杯によって歪められた歴史なんだ。この時代を破壊する為に召喚されたサーヴァントの可能性は十分にある。』

私の考えを伝えると、アーキマンから肯定の声が返ってくる。  
するとマシユから疑問の声が上がった。

「しかし彼女は最期までその心を折らず、火にくべられた時でさえ祈りを放さなかったと言います。

そんな方がこんなひどい事をするのでしょうか……？」

「救世主だ聖女だと持て囃され、最終的には信じていた者に裏切られて処刑された。

心の奥底では恨みや憎しみを抱いていてもおかしくはありません。

そちらの側面を主として召喚されれば、復讐に狂った聖女の出来上がりです。

そのアルトリアが黒く染まった姿で召喚されていたのを見た事があるでしょう？」

そう言つてアルトリアを指してやれば、奴も何とも言えない顔をしている。

「……そうですね。私も信じたくはありませんが、

私にもそういういった側面があるのは事実のようです。

かの聖女にもそのような側面があった可能性はあるでしょう。」  
「そんな……!」

マシユが信じられないと言った顔をしているが、

私からすればむしろそちらが正しい姿なのではないかと思う程だ。

「ですが、例え彼女の怒りが正當なものであったとしても。

それが人理を崩壊させると言うのなら見過ごすわけにはいきません。」

アルトリアがそう言うと同時に、兵士達がドラゴンが来たと騒ぎ始めた。

「ど、ドラゴン!?!」

マスターが驚いて空を見上げた。

『君たちの周囲に大型の生体反応が多数!あれは——ワイバーンだ!』

「ワイバーン!?!十五世紀のフランスに存在している生物ではありません!」

『まずい、この数じゃあ砦に被害が出るぞ!全滅もありえる!』

「マスター、全力で対応を!」

ワイバーンの群れとの戦闘が始まったが、私とアルトリアだけではこの数は倒しきれない。

撃ち漏らしたワイバーンを後ろでマシユが撃退しているが、

倒し損ねた内の一体がこちらを抜けて兵士たちの方へと向かっていった。

「しまった——！」

アルトリアが叫ぶがあればもう手遅れだ、間に合わない。

そう思った時、大きな旗のような槍がワイバーンを突き殺していた。

「その御方！どうか私と共に！続いてください！」

「あの人は……」

『彼女はサーヴァントだ！しかし反応が弱いな、どういう事だろう……』

「とにかく、我々も彼女に加勢しましょう！マスター、指示を！」

「わ、分かった！」

謎のサーヴァントとアルトリアがワイバーンの群れに突っ込み、次々に薙ぎ払っていく。

私はその二人が倒し損ねたワイバーンを確実に撃ち落とす。

ほどなくしてワイバーンの群れを撃退する事に成功した。

ワイバーンが近くに居ない事を確認すると先程のサーヴァントがこちらに歩み寄ってきてくる。

「あの、ありがとうございます。」

「いえ、当然です。それよりあなたは一体——」

「……すみません、少し事情がありましてその話は後で。」

私について来ていただけられないでしょうか。お願いします。」

先程の表情から一変して暗い表情でそう伝えてくる。

「誘われてしまいました。どうしましょう、先輩？」

「ついていこう。何か事情があるみたいだし。」

『僕も賛成だ。彼女がサーヴァントならきつとこの時代の事情にも精通している。

詳しい話を聞いてみよう。』

彼女に案内されるまま近くの森、その奥深くに辿り着いた。

「そうですね、ここならば落ち着けそうです。」

では改めて自己紹介を。

私のサーヴァントクラスはルーラー。真名をジャンヌ・ダルクと申します。」

「ジャンヌ……ダルク!？」

そう言った瞬間、アルトリアが武器を構えた。

「待ってください、私の話を聞いてもらえないでしょうか。」

あまり有益な情報ではなかったが、二つの情報を得る事ができた。

このジャンヌは数時間前に現界したばかりの上、

サーヴァントとしてはかなり弱体化しており、

本来持っているはずのスキルも知識も使えず、まるで新人のような気分である事。そしてもう一つ。この時代には自分以外のジャンヌ・ダルクが居るらしい事。

「同じ時代に同じサーヴァントが二体召喚された、ということでしょうか……？」  
『同時召喚かあ。有り得ない話じゃないけど。』

「……ともかく、その時代を特異点たらしめる原因がこれで確定した。』  
「しかし……分からない事が一つだけあるのです。」

「どれほど人を憎めばあのような所業を行えるのか……私にはそれだけが分かりません。」

その憎しみが理解できないと、まるで他人事のように言うジャンヌ・ダルク。

「何を他人事のように。そのジャンヌがお前の別側面ならば」

「例えお前にその感情がなくなるとも、理解はできるはずだろう。」

「……それが分からないのです。私はそのような憎悪を抱いた事がない。」

「火刑に処された時でさえ——綺麗な炎だな、と呑気な事を考えていたくらいで。」

「私が炎に焼かれて死んだのも全ては私の罪によるもの。誰も恨むはずがありません。」

「………何？」

「理解できないのはこちらの方だ。」



何しろこの女は本心からそう言っているのだから。

「……生前の私はただ、自分が信じた事の為に旗を振り、己の手を血で汚してきたのです。」

田舎娘は自分の夢を信じた。けれど流した血が多すぎた。

その夢の行き着く先がどれほどの犠牲を生むのか想像すらしていませんでした。「  
またしてもどこかで聞いたような話を聞かされる。」

「もちろん、後悔はありません。でも畏れを抱く事もしなかった。」

それが私のもつとも深い罪。結果、私は異端審問で弾劾されて——死ぬ事になりました。  
た。」

「あなたは……それでも後悔していないと?」

アルトリアも何かしら思うところがあつたのか、疑問を口に出している。

「はい、私の信じた道はきつと間違いではなかった。」

私の死によって民の心が救われるならそれでもいいと思つたのです。

そこには後悔も……恨みも憎しみもありません。

だからこそ竜の魔女、と呼ばれる彼女ジャンヌの存在が信じられない。」

……後悔していないのはまだしも、恨みや憎しみを一片たりとも抱いていない?

他の人間が救われるなら自分が死ぬ事すら構わないと?」

やめろ。そんな壊れた自己犠牲など聞きたくもない。

「……何故だ。」

「えっ?」

「お前は処刑される前にあらゆる責め苦を受けたのだろう、何故憎まない。騙されて処刑されたのだろう、何故恨まない。」

ジャンヌは嘘や建前など言っていない。

それが分かっているからこそ私は言葉を止める事ができなかった。

「何故全てを許す事ができる……!? どうしてお前は——」

——どうしてお前はそうなのだ、と言いかけて口を噤む。

自分でも気づかぬ内に彼女を重ねてしまっていたようだ。

「えっ……と……」

答えに詰まっているというよりは

いきなり言葉を捲し立てた私にどう反応していいのか分からないようだ。

マスターやマシユは狼狽えているし、アルトリアも黙ってこちらを見ている。

視線に晒されて居心地が悪くなったせいかな、少し頭が冷えた。

「……失礼。少し取り乱しました。今の言葉は忘れるがいい。」

「いえ……気にしないでください。あなたは……優しい方なのですね?」

「感性の壊れた人間は人を見る目もないようだな。」

「うーん……そうですかね？」

あらぬ誤解をかけられても面倒なのできつさと話を元に戻す。

「それで？お前はこれからどうするつもりなのだ。」

お前が何と言おうと竜の魔女たるジャンヌ・ダルクは間違いなく存在している。」

「……私の目的は既に決まっています。オルレアンに向かい、都市を奪還する。」

その為の障害である竜の魔女<sup>ジャンヌ・ダルク</sup>を排除する。

色々と分からない事も多いですが、ここで目を背ける事はできませんから。」

どうやら一人でも戦う覚悟らしく、マスター達もそれに気づいたようだ。

「ドクター。私達とジャンヌさんの目的は一致しています。」

今後の方針ですが、彼女に協力するというのはどうでしょうか？」

「もちろん。任務がなくても協力するよ。」

『そうだね、ここはジャンヌと協力するのが最善だ。』

アルトリアとモルガンも構わないかな？」

「ええ、人々を脅かす竜の魔女を見過ごす事は出来ません。」

敵の戦力は未知数。戦力は一人でも多い方がいいでしょう。」

「私は元よりそちらの方針に逆らうつもりはありませんので。」

マスターがそうしたいのであれば従いましょう。」

「では改めて、マドモアゼル・ジャンヌ。私達はあなたの助けになりたいと思つています。」

これからあなたの協力者として旗の下で戦う事を許してくれますか？」

「そんな……こちらこそお願いします。どれほど感謝しても足りないほどです。」

あなた達の力は先程見せていただきました。」

「こんな頼もしい方たちがいるのならとても心強いです。」

「よろしくね、ジャンヌさん！」

「ジャンヌで構いませんよ。私はただの田舎娘ですからね。」

さて、そうと決まれば早速出発したいのですが……夜になってしまいましたね。」

今日はここで一夜を明かし、明るくなつてから行動する事にしましょう。」

そうだ、皆さんの話も聞かせていただけませんか？」

その夜、カルデアの事情をジャンヌに聞かせているマスター達から

少し離れた場所では物思いに耽つていた。

思わぬ形で彼女のかつての姿を思い出してしまい、どうしても心が落ち着かない。

——今度こそ、必ず。」

そうして一人、色々な事を考えている内にあちらの話も終わっていたらしく、いつの間にかマスターが私を手招きして呼んでいた。どうやら食事の準備ができたらしい。

そういえばこうして野宿などするのはいつ以来だろうか。

遠い記憶を思い出し、少し高揚した事で先程までの陰鬱とした気分は晴れた。

次に野宿の機会があれば昔のように皆に料理を振舞ってやるのもいいかもしれない

## 邪竜百年戦争オルレアン（2）

森で一夜を明かし、これからの行動方針も決まった。

敵の戦力が未知数の状態でいきなりオルレアンに直接乗り込むのは無謀。

周辺の街や砦で何かしらの情報を得る為に、まずはラ・シャリテという街に向かう事になった。

昨日は一人でも戦うつもりだったと言うのにずいぶんと慎重な事だ。

などと言いつつ、道中を進んでいるとカルデアからの通信が入った。

『ちよつと待ってくれ。君達の行く先にサーヴァントが探知された。』

つてあれ、遠ざかって……ああ、駄目だロストした！早すぎる！』

それと同時に街のある方角から炎が見えた。

「街が……?!?急ぎましょう！」

そう言つて飛び出していったジャンヌに続いて街に辿り着いた時、既に街は壊滅していた。

「そんな……これ、私も……？」

『まずい、さっきのサーヴァント反応が反転してこちらに向かっている！』  
君たちの反応を察知したらしい！』

「数は!?!」

『数は……六騎?!しかも速度が速い!これはライダーか?!』

と、ともかく逃げるんだ!数で勝てない以上、逃げるしかない!』

「ジャンヌさん!サーヴァントがやってきます、すぐに——」

「……逃げません。せめて、真意を問い質さなければ……!」

「ですが……!」

「いえ、既に気付かれているのなら逃げてても無駄でしょう。

ここで迎え撃つ他ありません!」

どうやらジャンヌとアルトリアに退くつもりはなさそうだ。

私も逃げてても無駄だとは思っていたので逃げるつもりはない。

『駄目だ、もう間に合わない!』

アーキマンの声が響いた直後、

六騎のサーヴァントと大量のワイバーンが私達を取り囲むようにして現れた。

その中にはジャンヌと瓜二つ——黒く染まったジャンヌの姿もある。

どうやらあちらのジャンヌはこちらを見下しているらしく、すぐには仕掛けてこない

ようだ。

『ど、どうしようどうしよう何かないか何かないか。』

「ドクター、落ち着いて下さい。こちらまでパニックになりそうです……！」

マスター達も必死に打開策を考えているようだが、あの様子では何も浮かんでいないだろう。

「アルトリア……貴様、何か手はあるか？」

アルトリアは周囲を警戒したまま、こちらを向く事なく答える。

「いいえ、残念ながら。」

この数が相手では宝具を使ったとしても、全員を巻き込む事はできないでしょう。」

宝具の使用はマスターにも負担がかかる。

アルトリアと同時に私の宝具も解放できれば可能性はあるが

そこでマスターが倒れでもした場合、後がなくなってしまう。

……正直、手詰まりだ。戦闘で勝利する事は諦めるしかないだろう。

あちらのジャンヌも言いたい事を言い終わつたのか、こちらを始末すると宣言した。

『そ、そうだ、こういう時こそネットの力だ！』

ネットアイドルのページにGO！マギ☆マリの知恵袋！

“今サーヴァント六騎に襲われています、どうすればいいでしょうか” つと……』



この男はこんな時に何をふざけている！

「ネットって何？どこに繋がってるのそれ！？」

先程まで考えを纏められず、若干混乱していた様子のマスターだったが

アーキマンの醜態の方に気を取られたのか、突っ込みを入れる余裕ができたようだ。

それが目的で先程の醜態を晒していたのなら大したものだが、

通信先の様子ではおそらくそんな意図はあるまい。

『うん☆いつぺん死んで生まれ変わればいいと思うよ？』

うわあ、酷いなネットアイドル！人の気持ちをもるで理解してくれない！』

……何故か思い出したくもない存在マリーリンの姿が頭に浮かんできて

思わず通信越しのアーキマンの姿を睨む。

『ちよっ、コンソールが燃え出したぞ?!呪いでも飛んできたのかな?!』

「それ以上、下らない寸劇を続けるなら次は貴様を呪いますよ?」

あまりの不愉快さについて呪ってしまったが、私は悪くないはずだ。

「マスター。一か八か一点突破に賭けます。

私が先陣を切りますので、しっかりとついてきてください。」

アルトリアも一時撤退する事を選択したようだ。

後方の手薄な場所へと魔力放出で飛び出し、周囲のワイバーンを薙ぎ払って道を開い

た。

「今です！」

当然黙って見逃されるはずもなく、敵のサーヴァントがこちらに迫ってくる。

牽制を試みるが大した妨害はできず、徐々に距離を詰められてしまう。

「……そろそろお遊びは終わりです。」

全員、首と胸をバラバラにしてあげましょう。」

「いけません、皆さんだけでも逃げてください！……ここは私が食い止めます！」

ジャンヌが立ち止まり、殿を務めようとしたその時、

どこからともなく何かが二人のジャンヌの間に突き刺さった。

「……何？」

「ガラスの……薔薇？」

突然その場に現れたものに皆が意識を向けて静止した空間に、一人の声が響き渡る。

「ヴィヴ・ラ・フラーンス！」

声のした方角を見ると馬車のようなものがこちらへと向かってきていた。

「嬉しいわ、これが正義の味方として名乗りをあげる、というものなのね！」

「貴女、は……!?!」

「お待ちになって。ここは戦場ですもの、語らいはまた後で。」

アマデウス、やっちゃって！」

「任せたまえ。」

宝具、『死神のための葬送曲』

「くっ……！重圧か……！」

もう一人、馬車の中から姿を現した術者の宝具の発する邪悪な音が

凄まじい重圧を発生させて敵の動きを止める。

「さあ、今の内に私の馬車に乗ってくださいませ。ここを離れましょう。」

「逃がすかっ！」

黒いジャンヌ又は腕に炎を纏い、尚もこちらを攻撃しようとしている。

私はその前に黒い波を辺りに広げて敵の視界を防ぐ。

攻撃としてはほとんど無意味だが、目晦ましとしては十分。

「ちっ……！」

「今です。マスター、あの馬車に乗り込みなさい。」

「う、うん！」

マスターが馬車に乗った事を確認すると私とアルトリアも続く。

「それではごきげんよう皆様。オ・ルヴオワール！」

無事にあの場を離脱できた私達は近くの森に潜み、互いの事情を話し合った。

あの馬車を率いていた彼女の名はマリー・アントワネット。

革命によって処刑されたフランスの王妃らしい。

……どうも嫌な事を思い出す話が多い。

そしてもう一人の男はヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトという名の音楽家。

この男のやり取りを見ている限り、あまり関わり合いになりたくない類の相手だ。

その後、カルデアの事情やこの特異点の話、敵サーヴァントの真名の予想など

様々な話をしたところで、敵のライダーに襲撃されるという事態が発生し、

ライダーを撃破する際にいくつかの事実が明らかになった。

ライダーの真名は聖女マルタ、狂化により従わざるを得なくなっていた事。

そしてリヨンという都市に竜殺しが存在している事を明かして聖女マルタは消滅した。

夜が明けたらリヨンに向かう事が決まり、マスター達はそのまま眠りにつく。

私は周囲の警戒を兼ねて、少し離れたところを歩いていた。

こうして野営の見回りをするというのもずいぶん懐かしいものだ。

「ここに居ましたか。どこに行っただのかと思いましたよ。」

「……何の用だ？」

振り向くといつの間にかアルトリアが近付いてきていた。

「……少しだけ、あなたと話がしたい。」

先程までは自分から私に話しかけようともしなかったと言うのに、どういう風の吹き回しだ。

私が黙っているのを肯定と受け取ったのかアルトリアは返事も聞かずに勝手に話を始める。

「昨日から感じてはいた事ですが、今日の様子を見て確信しました。」

今の貴女は聖女ジャンヌやマリー王妃に対して憤りのようなものを感じているように見える。」

「……」

「昨日、貴女はジャンヌに詰め寄っていましたね。」

そして今日の王妃の話も……処刑の話になると貴女は妙な反応をしている。

まるでその死に納得していないかのように。」

……ジャンヌの時は我ながら冷静さを失っていたと自覚していたが、

今日もそこまで分かりやすい反応をしていたのだろうか。

「私は生前、あなたの事など知ろうともしていない。」

あなたにも何かしらの事情があつたのかもかもしれません。

ただ、それでも私の知るあなたは他人の死に、憤りなど感じる事はなかったでしょう。」

「……何が言いたい。」

「あなたは……本当に私の知っているモルガンなのですか？」

「……どう思おうとお前の勝手だが。」

私はお前の知るモルガン・ル・フェ。その事実に変わりはない。」

全ての事実を述べた訳ではないが、嘘ではない。

私はこちらの私の記録を有する事になった、あの時から私は私として生きる事を選んだ。

違うところがあるのだとすれば、それはただ境遇の差でしかない。

もしも私がこちらの世界で生まれ育ったとしたら、私のように成っていただろう。

「それならば……何故。」

「勘違いしないように言っておいてやろう。」

私は私からブリテンを奪った貴様が憎い。私をブリテンから追い出した人間達が憎い。

私を決して王に選ばない人理が憎い。それだけは今も変わらない。」

私から受け継いだだけの実感の伴わない憎悪。

それは贋作の憎悪なのかもしれないが、紛れもなく私を構成する要素の一つでもある。

「私は全てを失う結末など認めない。受け入れる事などできない。」

だから簡単に全てを受け入れているあの聖女や王妃に憤っていただけの事。」

「……」

「これで満足か？お前の知りたかった事には答えたと思うが。」

「……分かりました。今はこれ以上聞くつもりはありません。では。」

そう言つてアルトリアは来た道を引き返していく。

これでまた私の事を信用しなくなるかもしれないが、それならそれでいい。

元々アルトリアと馴れ合うつもりなどないのだから。

——それにしても私が他人の死に憤りを感じているなどの外れもいいところだ。

あの二人の話で憤りを感じたとするならば

それはただ彼女の事を思い出してしまったからだと言うのに。

案外アルトリアの直感とやらもアテにならないものだな、と

どうでもいい事を考えながら私もマスター達の元に戻る事にした。

## 邪竜百年戦争オルレアン（3）

リヨンという都市は既に滅ぼされており、

そこにはファントムというサーヴァントが街の死者を引き連れていた。

街中の死者を掃討するのは少々面倒だったが、ワイバーンよりは倒しやすい。

ファントムを倒し、竜殺しと呼ばれるサーヴァント、ジークフリートを見つけた。

どうやら複数の呪いを受けているらしく、ジャンヌだけでは解呪できないようだ。

『こりやあ相当厄介な呪いだぞ……』

モルガン、君ならどうにかできないかな？ 呪いはお手の物だろう？』

「……私を一体何だど？ まあ、それなりに扱う事はできますが……」

ここまで複雑に絡み合った呪いは私にも解呪できません。

他の者に移し替える事なら可能かもしれませんが……」

そう言って周りを見渡すと、真つ先に反応する者が二人。

「そういう事でしたら話は簡単です。呪いはこのトカゲ娘が引き受けますので。」

「何でアタシが呪われなきゃいけないのよ!? アンタが引き受けなさいこの泥沼ストー



カー！」

ここに来る途中で出会った二人組……清姫とエリザベート・バートリーというサーヴァント。

当初は何か争っていたがマスターが仲裁し、なし崩し的に協力関係となった。

清姫はよく分からないが、エリザベートはどうやら敵のバーサーク・アサシンと縁の深い……

と、言うよりもあのカーミラという女吸血鬼の過去の姿らしい。

一体何がどうなればこれがああなるのだろうか？

……それにしても彼女に似ている。と、一瞬思ってしまった事を忘れてしまいたい。

「……それは最終手段にしましょう。いざとなれば私が引き受けます。

聖人がもう一人居れば、この呪いも同時に解除できるのですが……。

どなたか、聖人のサーヴァントに心当たりはありますか？」

ジャンヌがそう言うと、皆心当たりがないようで沈黙が流れたが

ただ一人、清姫が少し思案した後口を開いた。

「……わたくし、この国に広く根付いた教えの聖人ならば、一人心当たりがあります。」

「本当ですか!？」

「ええ、エリザベートと出会う前に遭遇しました。」

彼の真名はゲオルギウス。こちらでは有名な聖人なのでしょう?」

『ゲオルギウス! 聖ジョージとも言われる聖人か。うん、彼ならば文句なしだろう。』

「清姫さん、その人はどこに行ったか分かりますか?」

「残念ですが、わたくしと違う方角に向かったものですから……」

「そうですか……」

「聖人が居るって分かっただけでも十分だよ、ありがとう清姫さん。」

「……まあ。大して役にも立っていないのにそんな風に嘘のないお礼を言われるなんて

……

わたくし、あなたを好きになってしまいかもしれません。わたくしの事はどうか清姫と。」

「そ、そう? うん、じゃあありがとう清姫。」

「お役に立てたようでも何よりです。」

……あのバーサーカーは何故か少し危険な気配がするが、少なくとも裏切りや殺意などではない。

マスターに害を成すわけではなさそうなので放っておいてもいいだろう。

「つまりその方を探さないといけないのね。」

……まとまって行動する方が安全なのでしょうけど、ここは手分けした方が良くない

かしら？」

マリーがそう提案するとアルトリアが同意を示した。

「そうですね、私もそれが妥当だと思います。いかがですか、マスター？」

「うん、私も賛成。手分けしてフランスを探そう。」

「幸いに、と言うのも何ですがフランス領は既に半分以下にまで追いやられているので

探す事自体は容易だと思えます。問題はどうか手分けするかですが……」

「いい事を思いつきました、今こそくじ引きをしましょう！」

「こういう時はやっぱりくじ引きよね！アマデウス、作って頂戴！」

「くじを引きたいだけだろう君は。分かったよ作るよ。」

「この人数なら3グループは作れるかな？」

アマデウスはそう言ってくじを作ろうとしたが今から作るのも時間の無駄だ。

「それなら私が用意してやろう。」

私はそう言つて地面に魔術で作り上げた剣を8本突き刺した。

「その剣を引き抜けば赤、白、黒のいずれかの色の炎が浮かび上がる。」

白と黒が3本、赤が2本だ。さあ、剣を抜くがいい。私は残った最後の1つを引き抜

こう。」

「まあ！こんな素敵なくじ引きを引けるなんて思わなかったわ！」

そう言つて真つ先に剣を引き抜いたのはマリィ。

剣を抜いた瞬間、刀身が赤く燃え上がった。しばらくすると炎は剣と共に徐々に消えていく。

それを見て他の面々も次々に剣を引き抜いていく。

結果、白を引いたのはマシユ、アマデウス、清姫。黒を引いたのはアルトリアとエリザベート。

そして赤を引いたのはジャンヌとマリィ。残る私は黒となった。

戦闘に参加できないジークフリートとマスターはマシユと同じ組だ。

「ジャンヌさん、これはカルデアの通信機です。魔力による念話が可能になります。

これで定期的に連絡を取り合いますよ。」

「分かりました、お預かりします。マシユさんや立香さんもどうか気をつけて。」

「ありがとう、みんなも気を付けて！」

マスター達と別れて数時間ほど経ったか。

道中はワイバーンなどが少々現れる程度で特にこれと言った出来事もない。

アルトリアは戦闘時以外はさっさと先に進んでいくので気にならないが

エリザベートは暇だの疲れた飽きただのと喧しい。

改めて彼女の姿をよく見るとそこまで似ているわけでもないが、どうしても思い出してしまう。

「何よ、さつきからアタシの事チラチラ見てきて。

……あつ、分かったわ！アンタ、アタシのファンなんでしょ!？」

これだけ自分に自信がある自由な生き方を彼女にもさせてやりたい。

……しかし何故かこのサーヴァントをあまり参考にしない方がいい気がする。

そんな事を考えていると突然前方からアルトリアがこちらに向かって叫んできた。

「二人とも！敵です！」

「ー」

「……Arrrrrrrrrrrr!!」

不気味な声が響いた次の瞬間、

黒い霧に覆われた正体不明の騎士が一直線にアルトリアへと襲いかかる。

「くっ……!」

「Arrrrrrrrrrrrrrrrrr!!」

アルトリア以外は眼中にないのか、執拗にアルトリアだけを攻撃している。

「どうやら、何か彼の琴線に触れたらしいわね。」

その言葉と共にカーミラが姿を現した。

「アンタ……!」

その姿を見るなりエリザベートがギリ、と歯噛みして彼女を睨みつける。

「まさかお前のような未完成品が現界していたなんてね。」

見たくもない自分が居るなんてまるで悪夢のよう。竜の魔女の気持ちがよく分かるわ。」

「好き勝手言ってくれるじゃない!それはこっちの台詞よ!」

どうしてアンタなんかサヴァントに……!」

「……ふん。自らの罪の結晶を否定するなんて幼稚にも程がある。」

お互いに見たくもないものが目の前に居る事だし……殺し合うしかないよね。」

カーミラはそう言ってアルトリアを攻撃し続けている黒騎士を一瞥した。

「さてと。正気を失っている黒騎士に付き合う道理はありません。」

そうやって敵を引き付けてくれるのならわざわざ連れ来てきたかいたがあつたと言うもの。

ランスロット、精々時間を稼ぎなさい。私とその忌々しい小娘を葬り去るまでね。」

「ランスロット……!?!」

名を呼ばれた事に反応したのか黒騎士の動きが止まった。

同時に覆っていた黒い霧が消え、はつきりとその姿が見えるようになる。

あれがアロンダイト……そして湖の騎士、ランスロットか。

ランスロット……私にとつても縁の深い名だ。アレもあの後どうなった事やら。

「A r r r r t h u r r r r r r r r r r ……」

「サー・ランスロット……こんな形で再会したくはありませんでした。」

「狂化してなお、貴様をつけ狙うとは。どうやら余程憎まれていたらしいな。」

「……」

アルトリアからの返答はない。

その代わり、ランスロットが再び動き出しアルトリアへの攻撃を再開した。

「アンタ達はその変な奴の相手をお願い！カーミラは、こいつだけはアタシがやるわ！」

エリザベートはそれだけ言い放つと槍を構えてカーミラと戦闘を開始した。

さっさと数を減らしたので手を出してやろうかとも思ったが、

あの自分勝手な娘があそこまで真剣にそう言うのなら好きにやらせてやろう。

視線を元に戻すと、アルトリアとランスロットが激しい戦いを繰り広げている。

狂化していても騎士としての技量は健在らしく、下手な攻撃を仕掛けようものなら

大したダメージも与えられないまま、私にも攻撃の矛先が向かってくるだろう。

ならばアルトリアが引き付けている間にこちらの宝具を叩きこんでやる。

とはいえあれだけ激しく動き回られては回避される可能性も高い。

私はどちらの戦闘にも関わっていない立場を利用して隙を伺う。

そうしてどれだけ時間が経っただろうか。

何度か斬り結んだ後、鏝迫り合いとなり動きが止まった。今が最大の好機だ。

『ロードレス・キャメロット  
『はや迫り着けぬ理想郷』』

「っ！」

私が宝具を放つと同時に、アルトリアはそれを察知して寸前で回避した。

ランスロットも次の瞬間には行動していたようだが、逃がしはしない。

「G a a a a a a a a a a !!」

「残念だ、いつそお前諸共、とも思っただがな。」

「あなたが宝具を放つ機会を伺っているのは気付いていました。

……あなたも私に気付かせるつもりで分かりやすく魔力を高めていたのでしょ。」

「……当たり前だ。この程度の事にも気付けないようなら本当に諸共消し飛ばして—

—」

「A r r r r r r r r r r !!」

「何……!?!」

私の宝具は直撃したはずだ。それなのにまだ倒れていないのか。

攻撃を行った私を敵と見なしたのか、それとも私がモルガンだと言う事に気付いたの



か

アルトリアへと向けていた狂気が全てこちらに向かつてくる。

「っ……………」

咄嗟の事で防ぎきれず、一撃を受けてしまった。傷は浅いが追撃を受けたら次は——  
そう思った直後、ランスロットの心臓を鎧ごと、剣が貫いていた。

アルトリアが私の後ろから突き刺したようだ。

「……………A……………アー……………サー……………」

「……………許してください。私は、私達は先に進まなければならない。」

「王……………よ……………私は……………どうか……………」

その言葉を最後にランスロットはそのまま消滅していった。

アルトリアはその場所に剣を持ったまましばらく立ち尽くしていたが

やがて気持ちの整理がついたのか一度空を仰ぎ、剣をしまった。

私には消滅する寸前、狂化の消えたランスロットから最期の感情が見えていた。

(……………狂気の去った後に心の底からの謝罪と、悔い改め……………あの愚か者を思い出させ  
おつて。)

血走った眼で私に狂気を向け、私がこの手で刺し殺した私の愛した幼き勇者。

あれも最期はどのような感情と共に消えてしまったが……………

忠臣というものは狂気に囚われるとこうなるのだろうか。

私は受けた傷を癒しながら、最後に触れたあの毛並みを思い出していた。しばらくすると後ろから喧しい声が聞こえてくる。

振り返ると血まみれになったエリザベートが戻ってきていた。

手ひどくやられたのかと思ったが、どうやら大半が返り血のようだ。

「アンタ達、待たせたわね！変な奴の相手をしてくれて助かったわ。」

「いえ。彼は私が戦うべき相手でしたから。……どうやら、そちらも終わったようですね。」

「当然よ、言いたい事全部言ってやったわ。アタシはアンタみたいにはなりたくないわ。」

「――」

過去の自分が未来の自分を否定する……そんな事もあるのだな。

……もしも、かつての私が今の私を見たら何と言うだろうか。

同じように否定されるだろうか。それとも……

答えは分からなかった。

## 邪竜百年戦争オルレアン（4）

ゲオルギウスを発見したとの報せを受けてマスター達と合流したが

目的の人物を見つけたというのに、何となく皆浮かぬ顔をしているように見えた。

聞けばジャンヌとマリーがゲオルギウスを見つけたものの

竜の魔女の襲撃に遭い、ジャンヌ達を逃がす為にマリーが残ったらしい。

そのまま帰還しないと言う事は、おそらく消滅したのだろう。

『……けど悪い報告ばかりじゃない。

ゲオルギウスを迎え入れた事でジークフリートの解呪も可能になった。

そしてカーミラ、ランスロットの二騎を退去させている。戦力差は大きく縮まったはずさ。』

「……はい。敵のサーヴァント、そして邪竜ファヴニール。

それらを全て倒す事も可能でしょう。今こそ、オルレアンへ出陣する時です。」

新たなサーヴァントを召喚される可能性があった為、すぐにでもオルレアンに向かう

事となった。

オルレアンに辿り着いた時には既に敵のサーヴァントも待ち構えており、各々が竜の魔女の命令を受けてこちらへと向かってくる。

「あなた達はあの邪竜の元へ。ここは私達が引き受けます。」

ゲオルギウスがそう言って向かってくる敵のセイバーの剣を受け止めた。

「僕もちよつとアイツに八つ当たりしてくるよ、後は任せていいかな？」

アマデウスがそう言って処刑人の元へと向かっていく。

「アタシにここまでさせるんだから、負けるなんて許さないわよ子ジカ！」

エリザベートがランサーと槍をぶつけ合いながら叫んでいる。

清姫もまた炎を放ち、敵のアーチャーからの矢を防いでいる。

「さあ、わたくし達の役目はここまでです。」

あなた達はあの邪竜と竜の魔女を討ってくださいませ。」

「皆、すまない。恩に着る。」

ここまで来れば後はジークフリートの宝具でファヴニールを仕留めるだけ。

マスター達は全力でジークフリートを援護し、その宝具を万全の状態で発動させた。

ファヴニールはその光で消滅し、それを見ていた竜の魔女は城へと撤退。

おそらく新たなサーヴァントを呼び出す為だろう。

ジークフリートは残るサーヴァントとワイバーンとの戦闘を援護する為にこの場に

残り、

私達は竜の魔女を追って城へと突入した。

「いいいよ、竜の魔女との対面ですね。もはや、何も邪魔はないはず。

……行きましょう！」

最奥へと辿りついた時、そこではやはり召喚の儀式が行われていたが私達に気付いた竜の魔女はその儀式を中断する。

「……思っていたより、早かったですね。

新たなサーヴァントの召喚は間に合いませんでしたか。」

「……竜の魔女。」

「まあいいでしょう。それならば直接、私の手で葬り去るまでの事。」

「……その前に一つだけ。貴女に伺いたい事があります。」

「今更、問い掛けなど——」

「貴女は、自分の家族を覚えていますか？」

「……………え？」

それはとても簡単な問いだったが……竜の魔女が固まっている。

「貴女がもし私の闇の側面だとしても。」

ただの田舎娘だったあの頃の記憶を忘れられるはずがない。

いえ、忘れられないからこそ裏切りに絶望し、嘆き、憤怒したはず。」

「……………」

竜の魔女は答えない。否、答えられないのか。

そこで私もこの竜の魔女がどういった存在なのかを理解した。

「…………やはり、そうなのでですね。どのような感情で貴女に向き合えばいいのか。

私にはそれが分からなかった。でもこれでようやく分かりました。」

「何を——」

「怒りでもなく、拒絶でも、ましてや憎しみでもありません。

私は哀れみを以て、貴女を倒します。」

「黙れ！ならば絶望が勝つか、希望が勝つか……」

あるいは殺意が勝つか、哀れみが勝つか、ここではつきりさせてやる！」

ジャンヌの哀れみが竜の魔女の逆鱗に触れたのか、苛烈な攻撃が絶え間なく向かってくる。

それに加えてこの狭い城内にもワイバーンが群れを成して襲ってきた。

マシユはマスターを守るのが精一杯のようで、アルトリアとジャンヌも攻めきれないようだ。

あの黒いアルトリアの時もそうだったが、

聖杯からの供給を利用して宝具を連続で使用してくる相手は厄介極まりない。

「私の旗は敵の攻撃を全て受け止める為のものなのですが……」

彼女の旗はどうかや、それを反射する為のもののようにです。」

「これでは攻撃ができません！ジャンヌさん、何か手はないのですか!？」

「……宝具を解放し、再発動するまでの間にはわずかな時間がある。」

彼女の宝具の発動中にこちらが致命傷となる攻撃を仕掛けられれば、あるいは……」

『無理だ、現実的じゃない！そうするにはあの攻撃を受けながら攻撃をしなきゃならな

い！

君やマシユの宝具もなしに、あの攻撃を受けきるのは厳しいぞ！』

「じゃあ、マシユが宝具を使ってる間にモルガンかアルトリアの宝具を使えば……」

『駄目だ。宝具の同時発動となると立香ちゃんにかかる負担は膨大だ。』

万が一の事を考えたら、そんなリスクのある行動はさせられない。』

「……でも、他に手がないなら。私、やるよ、ドクター。」

アーキマンは反対していたが、マスターはやると言った。

……その目には不安もあつたが、決意を固めたようだ。

その意志を見せたマスターに免じて、私も少し危険を冒す覚悟をしよう。

「……その必要はありません。」

「モルガン？」

「攻撃を受けながら宝具を解放するだけなら……その役目は私が引き受けましょう。」

「なっ!？」

何らかの手があるならわざわざマスターに危険な真似をさせる必要はない。

それにあの竜の魔女には私も思うところがある。

多少危険な賭けではあるが、まあ死にはしないだろう。

「何を驚くのです。サーヴァントは所詮使い魔。」

「こういう時こそ、こうして使い捨てるべき存在ですよ。」

「でも……」

「……マスター。ここは私も前に出ます。」

マシユ、貴女は何としてもマスターを守り抜いてください。」

アルトリアが躊躇っているマスターに声をかけ、私の隣に並び立つ。

「……貴様まで前に出てくる必要はないのだが？」

「あなたの事です。何らかの勝算があるのでしよう。」

それがマスターを守る事に繋がるのなら、私は全力でそれを援護するだけです。」

「……ならば精々、私の盾となってもらおうか。」



そうして前に出た私とアルトリアを竜の魔女が睨みつける。

「いい覚悟です。あの残り滓の前にまずは邪魔な貴女達に消えてもらいましょう。」

憎悪によつて磨かれた我が魂の咆哮を受けるがいい！

ラグロンドメントデユヘイン  
吼え立てよ、我が憤怒！」

降り注ぐ無数の黒い槍をアルトリアが薙ぎ払つて撃ち落とす、

だがその全ては捌き切れず、いくつかの槍が私の身体を貫き、業焔が私の身を焼く。

これが竜の魔女の憎悪か。確かにこの憎悪は身を焦がすほどのとてつもなく強いものだ。

だが……信じていた者に裏切られたその絶望、憎悪がこんなものであるはずがない。

「……本当の怨嗟、憎悪というものがどういったものなのか知るがいい！」

ロードレス・キヤメロット  
はや辿り着けぬ理想郷！」

「つーぐつ……!!」

私の宝具が竜の魔女を飲み込むが、致命傷ではない。

「おのれ……！」

竜の魔女が私への反撃を試みるが、その前にジャンヌの旗が竜の魔女を貫いていた。

「そんな。馬鹿な、有り得ない、嘘だ。」

私は聖杯を所有しているはず……！負ける事などありえない……！」

「終わりです、竜の魔女。貴女はたった今敗れた。」

「私は、まだ……」

その瞬間、どこからともなく触手のようなものが現れ、ジャンヌと竜の魔女を引きはがす。

「おお、ジャンヌ！ジャンヌよ！何という痛ましいお姿に……！」

「ジ、ル……」

「ジル……やはり、貴方が……」

あれはキャスターか？まだサーヴァントが残っていたか。

どうやら、ジャンヌの知己であるようだが。

キャスターが何事かを伝えると、竜の魔女は安堵の表情を浮かべて消滅していった。

「お初にお目にかかりますな、皆さん。私の真名はジル・ド・レエ。」

そしてお久しぶりです、ジャンヌ・ダルク。」

「貴方は、聖杯の力でジャンヌわたしを作ったのですね。」

「もちろん、私は貴女を蘇らせようと願いました。当然でしょう？」

……ですがそれは叶わなかった。万能の願望器でありながらそれだけは叶えられな

いとー！」

先程まで穏やかな口調だった男が突然激昂し、叫び始めた。

「だが私の願望など貴女以外にはない！」

ならば私が信じる聖女を！私が焦がれた聖女を！新しく造り上げる事にしたのです  
！」

やはり竜の魔女はジャンヌの別側面などではなかったようだ。

あれはこの男がそうであってほしいと願ったジャンヌの姿だったのだろう。

……私もかつて善良そのものであった彼女に悪逆、残忍に生きろと願った事がある。  
例えそれが彼女の本来の性質を歪める事になっても。

本来の彼女とかけ離れた存在になったとしても。私は彼女に生きていてほしかった。  
だから大切な存在を歪めてでも、という気持ちは分からなくもない。

「さて……我が聖女の願いを叶えなければ。

まずはフランスを救わんとする貴女方を一掃しなければならぬ。

我が宝具にて呼び出す異界の悪魔がお相手致しましょう！」

キヤスターが手にしている本から魔力が発したかと思うと

突然、地上から巨大なおぞましい生物が城を半壊させながら姿を現した。

『巨大な魔力反応！何だこれ……とんでもない大きさだ！』

「何これ……タコの足みたいなのが!?化け物……！」

マスターも今までにないほど恐怖を感じているようだ。

どちらかといえば見た目のせいであるような気がしなくもないが。

「……これは。確か、海魔と呼ばれている悪魔……！」

アルトリアも嫌悪感を隠そうともしない。

「ジル！もう止めてください！」

例え私を蘇らせたとしても、私は竜の魔女にはならなかった！

私はこんな事を望んでいません！」

「……貴女は赦すだろう……しかし私は赦さない。

神も！王も！国家とて！滅ぼしてみせる！殺し尽くしてみせる！

それが聖杯に託した我が願望！」

キヤスターが海魔へと取り込まれながら叫ぶ。

「我が道を阻むな、ジャンヌ・ダルクウウウツ！」

「ジル……！」

『とりあえず撤退だ！その城は崩壊する！一旦下がって他の皆と合流するんだ！』

「……分かりました！」

マスターを抱えたマシユと共に、私達は崩れ始めた城から脱出する。

振り返るとそこには城の全てを飲み込むほどの大きさの生物が蠢いていた。

そういえばカルデアが退けたというノリツジの厄災はこれと似たようなものだった

か？

と、どうでもいい事を思い出しながら、マスター達を追って城を離れた。

## 邪竜百年戦争オルレアン（終）

フランスを滅ぼす為に召喚された巨大な海魔との戦闘を私はマスターのすぐ隣で傍観していた。

竜の魔女との戦闘で負った傷を理由に戦うなどマスターに言われてしまったからだ。これ以上無理をしないでほしいのだから。この程度なら大した事はないのだが……まあ手を出さずに見ていると言うのなら高みの見物を決めるとしよう。

竜の魔女側のサーヴァント達は私達が竜の魔女と戦っている間に、全員倒れたようだ。

エリザベート達はあの巨大な生物を見てすぐにこちらに合流し、戦闘に参加した。

その戦闘はサーヴァント達が次々に宝具を解放し、

最後にアルトリアの宝具によって海魔を倒すという激しくも単純なものだった。

聖剣の出力がもう少し上ならばキャスター諸共、消滅させていたのだろうか

そこまでの出力はまだないのか、残骸の中にはキャスターの姿がある。

もつとも致命傷は受けていたらしく、ジャンヌと少し会話したかと思えばそのまま消

滅した。

『聖杯の回収を完了した！これより、時代の修正が始まるぞ！』

レイシフト準備は整っている。すぐにでも帰還してくれ！』

その声を聞いてジャンヌ達がこちらに駆け寄ってくる。

「もう、行かれるのですか？」

「はい、私達にはまだまだやらなければならぬ事がありますから。」

「へえ……そうなのね。まあ、アタシはカーミラに勝ったからよしとするわ！」

じゃあね、子ジカ！なかなか悪くない感じだったわよ？」

そう言つてエリザベートは真つ先に消えていった。

「……まあ、もうお別れだなんて。」

せつかく、貴女様の事を……だと思つたところなのですのに。

でも安心して下さい。わたくし、些か執念深い性質なので。

必ずまた会えるものと信じておりますわ。」

どこか不穏な気配を漂わせながら清姫も消えた。

「聖杯戦争としてはあまりに歪んだ形でしたが、竜殺しと共に戦えて光栄でした。

この様子だと私達が再び召喚される日も遠くはないでしょう。」

「俺の方こそ、名高き聖ゲオルギウスと同じ陣営で戦えるとは。」

良いマスターにも巡り合えた、俺達はいつでも助力しよう。」

「やれやれ、ようやくお役御免か。なかなかいい指揮だったよ立香。」

実にやりがいのある仕事だった。これならマリーにも怒られずに済むのもさ。

機会があれば、また僕の音楽を聞かせてあげるよ。」

ゲオルギウス、ジークフリート、アマデウスの3人もそう言って消えていった。

残ったのはジャンヌだけだ。そのジャンヌはフランス軍の騎士らしき男と

何か話しているようだが、大方裏切った聖女に掌を返しているところだろう。

都合のいい時だけ救世主扱いする言葉など聞くに堪えない。

さつさとカルデアへと帰還させてほしいと考えていると、マスター達の輪郭がぼやけ

始めた。

「マスター……そろそろのようです。」

「マスター、それにマシユさん、アルトリアさん、モルガンさん。」

本当に、ありがとうございます。

フランスを救う事ができたのは皆さんのおかげです。」

「いいえ、私達だけでは成し遂げられなかった。」

ここに居た全ての者達の力があつたからこそ、この国を救う事が出来たのです。

同じく国を背負った者として、望ましい結末でよかつた。」



礼を言うジャンヌにアルトリアが言葉を返す。

マスターやマシユもそれぞれジャンヌへの感謝の意を伝えている。

最後にジャンヌは私の方にも顔を向けてきたが、私からこの女に言う事など何も無い。

私が黙っていると少し残念そうな顔をした後、あちらから話し始めた。

「……あの時、あなたの宝具から感じた憎悪や絶望は私には計り知れないものでした。ただどそんなものを抱えていながらも、貴女は私達の為に戦ってくれた。

やっぱり、貴女は……優しい人ですね？」

……私に対して心の底からそう信じているようだ。

私はこの感性が壊れた聖女にはもう何を言っても通じないだろうと諦めた。

「こうして皆さんに出会った事も共に戦った事も

全てなかった事になってしまふのは、少し悲しいですが……

皆さんとはまた何処かで出会えそうな予感がします。私の勤は結構当たるんですよ。」

既に私に対しての印象が間違っているのだが。どうせ言っても無駄だろう。

「——さようなら。そして、ありがとう。」

全てが虚空の彼方に消え去るとしても残るものが、きつと——」

聞こえたのはそこまでだ。ジャンヌの姿が見えなくなる。

レイシフトが実行されたのだろう。私達は浮遊感と共にカルデアへと帰還した――

「お帰り、みんな！お疲れ様！」

初のグランドオーダーは君たちのおかげで無事遂行された。

……うん、本当によくやってくれた。これ以上ない成果だよ。

立香ちゃん、君はもう一人前の、僕らカルデアが誇る新しい魔術師だ！」

カルデアに戻った私達をアーキマンが出迎えた。

そこにダヴィンチもやってくる。

「お疲れ様。はい、これ最新の観測記録だ。見てごらんロマニ。」

「お……おとおお！やった、十五世紀フランスの修正は完璧だ！」

まだ七つの内、たった一つだけけど……ちゃんと人類史をあるべき姿に戻せたんだ

！

やったね、立香ちゃん！」

「うん……まだ全然、そんな大それた事をした感じはしないけど！」

「その内、きつとレフも姿を現すだろう。」

それまでに、こちらの陣営も強化しておかないと。」

「まあそんな細かい事はどうでもいいさ！今日のところはこれでミッション終了だ！暖かいベッドとシャワーが恋しいだろう？遠慮せず部屋に帰って休むといい。」

「本当？」

「はい、その提案は抗いがたい魅力に満ちています。失礼しますドクター。」

その言葉を聞いてマスターとマシユは休息の為に部屋へ戻っていった。

「モルガンとアルトリアもお疲れ様。」

初めての任務でいきなり一緒だったけど、これで姉妹の溝も埋まったりは——

「その口を閉じなければ呪いますよ？」

「……してるわけないよね、うん！」

軽口で適当な事を言うアーキマンを睨みつけて黙らせる。

アルトリアは特に何も言わなかったが、奴も快く思っていないが故だろう。

「……では、私もこれで失礼します。」

アルトリアはそれだけ言うのを私を一瞥してそのまま去っていった。

私もそのまま自分に割り当てられた部屋へと戻ろうとしたのだが……

「待った、君は竜の魔女との戦闘で結構な傷を負っていただろう？」

ちゃんとメディカルチェックを受けてもらわないと！」

「……必要ありません。この程度なら自分で治療できますから。」

「そういう訳にはいかないよ。君ももうカルデアの一員なんだ。」

何らかの呪いの影響があるかもしれないし、念の為に検査は受けてもらわないと。」

「……」

マスターもそうだったが、何故ここまで私の身の心配をしているのだ。

未だかつて自分の身をここまで心配された事があつただろうか。

……まあ今の状況では貴重な戦力を大事にすると言うのも分からなくはない。

しつこく言われ続けるのも面倒だ、ここは大人しく従っておくでしょう。

「……分かりました。」

検査を受けながら今回の特異点の事を考える。

たった一人の聖女の死によって心が壊れた男が望んだ血腥いフランス。

あの男の真の望みはジャンヌ・ダルクを生かす事だけだった。

……私も何かが変わればあのようになっていたのかもしれない。

憎悪によって国を滅ぼしてしまった汎人類史の私のように。

「よし、現時点で確認できる異常はないみたいだ。」

お疲れ様、とりあえず検査はこれでお終いだよ。」

アーキマンから検査結果を伝えられたが、問題はなかったようだ。

私が部屋を出ようとするとその前にスタッフの一人が報告に訪れた。

「どうやら新たな英霊の召喚を行うらしい。フランスで縁を結んだ者でも召喚するのだろうか。」

「いずれにせよ、わざわざ召喚に応じる物好きなきな輩を一目見ておこうと、

興味本位で召喚サークルのある部屋へと赴いた。」

「そこではマスターとそのサーヴァントが契約を交わしていた……の、だが――

「問おう、貴様が私のマスターと言うやつか？」

「……………私はそつとその場を離れる事にした。」

## オルタの系譜

黒いアルトリアが召喚されたあの場では、奴に遭遇する事を避けたが同じカルデアに居る以上、こうなるのは必然だったと言える。

あれからしばらくして、私は通路で奴に遭遇してしまった。

あちらも私に気付いたようで足を止めてこちらを見ながら何事か考えている。

私は奴を無視してそのまま通りすぎようとしたのだが……

「話には聞いていたが、本当に貴様が居るとはな。」

アルトリアがそう言いながら私の目の前に移動してきた。

仕方なく私も足を止めて奴を睨む。

「……そこをどけ、アルトリア。」

「ちよūdい。貴様にも協力してもらおうか。」

「……どけと言ったのが聞こえなかったのか。私は貴様に用などない。」

「マスターを鍛える為だ。」

「貴様もサーヴァントならマスターの為に働くがいい。」

「……」

確かに今のマスターは私の知る頃よりもかなり軟弱だ。

それが少しでも強くなるのなら私としても好都合ではあるのだが

よりにもよって奴の話に乗らなければならぬというのが腹立たしい。

「……沈黙は肯定と捉えるぞ。」

貴様には冬木の大聖杯の中心にレイシフトしてもらおう。」

「……何？」

アルトリアによれば大聖杯の中は時間と空間が安定してないらしく

その時空を利用してフランスの特異点を再現するつもりだという話だった。

「私はフランスの特異点にも竜の魔女にも縁はない。」

だが貴様はその特異点で竜の魔女と戦い、傷も負ったらしいな？

貴様なら十分にその触媒として機能するだろう。」

要するにあのフランスの特異点での戦いを

もう一度マスターに体験させる事で戦闘の経験を積ませようという事か。

……少々乱暴ではあるが確かに効果的ではあるだろう。

「私はこれから立香とマッシュを迎えに行く。」

貴様にはそれまでに準備を済ませておいてもらおうか。」

アルトリアはそれだけ言い残すと私の返事も聞かずに立ち去った。

私の知るアルトリアに比べるとずいぶんと傍若無人な事だ。

奴の言う事など無視してもいいのだが、マスターに経験を積ませるといふ話自体は悪くない。

アルトリアが提案せずとも、私もいずれマスター達を強化しようと思っただけだ。奴に先を越されたのは癪だが、ここは奴の思惑を利用するとしよう。

私は管制室に向かい、アーキマンにマスター達への言伝を残すと大聖杯へとレイシフトした。

私がレイシフトした時には既にそこはフランスの特異点を再現した空間と化していた。

ここはフランスの特異点にあったオルレアンの城の通路だろう。

これもある意味、願望によって生み出された有り得ざる空間と言えるかもしれない。そうして様々な事を考えながら時間を潰している。

しばらくしてアルトリアと共にマスターとマシユがレイシフトしてきた。

「ここは……フランス？大聖杯に跳んだはずなのに……」

「あ、ドクターと連絡がつかない。何かあったらすぐ連絡してくれって言ってたのに。」  
「どうやらアルトリアは何も説明せずに二人をここに連れてきたようだ。」



私に対してだけかと思ったが、このアルトリアの会話には言葉が足りないらしい。マスターの為だと言うのなら、その二人くらいはちゃんと説明してやればいいだろうに。

「ここは大聖杯の中であり、どこでもない断篇。

一時的に特異点を再現する場と思えばいいでしょう。」

仕方なく私が代わりにこの場の説明をしてやると、二人は私が居る事に気付いた。

「モルガンさん、先にいらしていたんですね。」

「その様子ではここに呼ばれた理由すら聞いていないようですね。」

冬木の大量杯の中にレイシフトしろ、などという言葉を鵜呑みにするとは。

もし私やアルトリアが何か企んでいたらどうするつもりだったのですか？」

「まあ、モルガンとアルトリアの頼みだったし。大丈夫かなって。」

「……………そうか。そういう事なら私も手は抜けないな。」

マスターもそうだが、その一言だけでやる気を出すアルトリアもアルトリアだ。

黒く染まつても尚、根底はあのアルトリアのままか。

「マスター、通路の先から足音です！敵性反応と思われます……………」

通路の先から何体かのシャドウサーヴァントがこちらに向かってくる。

あれも以前のフランスで戦ったサーヴァントだろう。

「さて、まずは小手調べです。蹴散らしますよ、マスター。」

「ちよつと待つて、私まだ何にも説明受けてないんだけど!」

「いいからさっさと指示を出せ、立香。敵がそんなものを待つはずがあるまい。」

アルトリアの言う通り、敵はこちらの事情などお構いなしに攻撃を仕掛けてくる。

咄嗟にマスターを守ったマシユは、同時に敵の正体にも気づいたようだ。

「このシャドウサーヴァントは……ここはまさか——」

「察しがいいな、ここは貴様達を通り過ぎた一つの結末だ。」

今一時の再現にすぎないが、ただ戦うだけなら幻と言う訳でもない。

何、一度は倒した相手であり、今回は世界の命運を賭けた戦いでもないだろう?

純粹に生き死にを楽しめ。負けても死ぬだけだ。」

アルトリアはそれは楽しそうに戦闘を開始した。マスターの為とは言っていたが

特異点の記録を見た貴様が暴れたいだけなのではないか、私はそれに利用されただけ

なのでは?

「そ、そこまで達観はできません……!というか、死は怖いです!」

「それは当然だ、その恐怖を楽しめと言っている。貴様に器を託した英霊はそういう男

だった。」

「え……?」

マシユに器を託した英霊の名ならば私も知っている。しかしそれは私の口から言うべき事ではないだろう。

「本命はこの先だ。あまり全力は出さず、六分の力で切り抜けよ。」

アルトリアに言われるがまま、戦闘を始めたマスター達だったが

以前戦った経験が生きているのか、それともアルトリアがやる気を出しているのかあまり苦戦する事もなく敵を倒し、通路の先に進む事ができた。

この様子なら玉座では間違いなくあの竜の魔女が再現されているだろう。

マスター達もこの先に誰が居るのか気付いたようだ。

「マスター、玉座に到着しました。……ああ、やつぱり……」

「……不快ね、不快だわ。これは何？悪夢の続き？」

一度倒された偽物をもう一度引きずり出すなんて誰の考えなのかしら。」

竜の魔女が辺りを見回して腹立たし気に吐き捨てる。

消えたはずの自分の意識が再び蘇ったとなれば混乱もするだろう。私にも覚えがある。

「そちらのマスター？それとも盾のお嬢さん？」

いいえ、違うわよね。こんな悪趣味な事を考えるなんてまともじゃない。

そうでしょう？その、ブリテンを滅ぼした魔女様？」

自分の置かれた状況を理解したのか竜の魔女がこちらを睨みつけてくる。

「偽物の私に本物の憎悪を刻んだだけじゃ満足できないと言う訳？」

死人に鞭打つなんてさすがと言うべきかしら。

私と違ってちやあんと祖国を滅ぼした本物の魔女様はやる事が違いますね。」

「……」

……いざこうして他人から言葉にされると何とも言えない感情が湧いてくる。

「私」はきつと滅ぼしたくて滅ぼした訳ではないだろう。もしそうなら今の私はここに居ない。

「——お前は多弁だな。ジャンヌ・ダルク本人も話し好きなのか？」

私が黙っているとアルトリアが横から口を挟んできた。

何か奴の琴線に触れたのか、言葉に棘を感じる。

「あらあら、淀みきつたブリテンの騎士王様もご一緒だなんて。」

同窓会でも開いてたのかしら？ ずいぶんと平和な国ね。」

「やはり話し好きのようだな。貴様の大本もオルレアンの乙女などと呼ばれ喜んだ女だ。」

さぞお喋りなのだろう。なにしろ、町娘と変わらない精神構造だ。」

言葉こそ先程までの調子と変わらないが明らかに相手を挑発している。

私もアルトリアのついでに軽く言い返しておくとしよう。

「確かにあの聖女はお喋りだったな。ここまで低俗で凶悪ではなかったが。」

「はあ？何アンタ達。ブリテン出身ってみんな阿呆なの？」

あつさりと挑発に乗ってきた。あの聖女よりはよほど扱いやすい女だ。

「先輩、とても険悪な空気です……！話し合いの余地がありません……！」

「当然だ、我らはこの女を倒しに来たのだから。立香、貴様はまだマスターとして未熟だ。」

より強い敵、よりおぞましい敵と戦い、腕を磨け。」

「ああ、そういう事。お優しい騎士王様はマスターちゃんの為に試練を用意したって訳。

いいわよ、受けてたつてあげる。でも気を付けてね？この私は低俗で凶悪だからあ

ー

以前の恨みもこめて、マスターちゃん的首根っこ、串刺しにしてあげちゃうから！」

「いい叫びだな旗持ち。お前を相手に選んでよかった。」

「何それ、友情とかキモいんですけど。悪に落ちた者同士、感じ入るものがあつたつてオ

チ？」

「いや？単に潰し甲斐のある相手を選んだだけだ。お前個人に何の思い入れもない。」

それに悪に落ちた者同士とは言うが、汚れ具合では貴様の方が格段に上ではないか

「？」

「ふふ……それはこちらの台詞でしてよ、卑しい先王、ヴォーティガーンのそっくりさん！」

その名に反応したのはアルトリアではなく私の方だった。

かつて私の戦友の命を奪った存在の名を聞いて思わず手に力が籠る。

その言葉を最後に竜の魔女はこちらに襲いかかってくる。

あの時同様、強敵ではあったが一度は倒した相手だ。

マスターやマシユもあの時よりは的確な動きができています。

そして竜の魔女が決定的な隙を見せたその瞬間。

「約束された勝利の剣！」  
エクスカリバー・モルガン

………アルトリアが放った宝具で決着はついた。

「……あーはいはい、私の負け私の負け！」

はっ、何なのその宝具？ずいぶん面白い真名じゃないの。」

竜の魔女が明らかにこちらの方を見て笑っている。

「いいわ、本当はそのマスターちゃんへの恨みなんてないし、

最後に面白いものも聞けたから潔く消えてあげる。」

そう言っただけであっさり竜の魔女は消えていった。

「敵サーヴアント、消滅を確認……ふう。とにかく強敵でした……」

マスターとマッシュが安心したように一息つくくと、アルトリアは独り言ちていた。  
「……悪に落ちた者同士の共感、か。確かにそれは否定できないな。

生前、理想に縛られた英霊ほど私達のように乖離した人格を持つのだろう。」

「そうかな、今のジャンヌとアルトリアは違うと思うけど……」

「それは貴様がそう信じているだけの話だ。

……だが貴様がそう信じている限りは、私も自分も決めつける愚は犯すまい。」

このアルトリアは言動こそ傍若無人だが、絆されやすいのは変わらないようだ。

「それで、少しは技量は上がりましたか？マスター。」

「もちろん！ほんの少しだけ、だけど。」

「それはよかった。ではカルデアに戻るがいい。

私やモルガンはこんな形でしか役に立たない女だ。

次の機会があればまた強敵を用意してやる。」

聞き捨てならない事を言われたが、今のところその通りなので言い返す事ができない。  
い。

そのままマスターとマッシュはカルデアへと帰還し、残されたのは私達二人だけだ。

そういうえば以前からこのアルトリアには問い質さなければならぬ事があった。

今がその絶好の機会だろう。

「……ところで、貴様は嫌がらせの天才か？」

その見るからに壊す事しかできない宝具に、何故私の名を付け足した？」

奴は一瞬、虚をつかれたような顔をしたが、すぐに私を嘲るような笑みに変わった。  
「ふっ、何を言い出すかと思えば……」

この壊す事しかできない宝具に名を加えられたのだ。むしろ光榮に思うがいい。  
奴が何を考えていたのか完全には分からなかったが、その目は明らかに私を弄んでいた。

「貴様……」

「だが貴様への認識は多少改めてやろう。」

まさか貴様がこのようなマスターの修行に真つ当に付き合うとはな。」

「……」

「話はそれだけか？ならば私もこれで帰還する。」

それだけ言つてアルトリアも消えた。

私の知るアルトリアとはずいぶん違うが、私にとっては奴以上に面倒な存在だった。  
やはり、アルトリア奴らとは相容れない。そう思いながら私もカルデアへと帰還した。



## 永続狂気帝国セプテム（1）

あれから程なくして第二の特異点が発見された。

今回もマスターやマシユと共に私もレイシフトに同行する事となった。

今回のレイシフト先は古代のローマ。汎人類史の私が知る時代より更に古い時代。

ローマ……こちらのブリテンの敵国だったか。もつとも、私にとってはあまり関係のない事だ。

マスター達と共にレイシフトしてきた私の耳に、不機嫌な声が聞こえてくる。

「ここが古代ローマの地か。」

どうやら首都ではなくどこかの丘陵地帯のようだが。」

黒いアルトリアが辺りを見回して言い放つ。

不機嫌そうなのはいつもの事だが、ローマと言う地には奴も思うところがあるのだろうか。

「ところで立香、気付いているか。」

アルトリアが丘の向こうを見て問いかける。

その先から多人数による戦闘の音が聞こえてくる。まるで戦争のようだ。

マシユやマスターもそれに気付いたらしくその可能性をアーキマンに伝えていた。

『この時代にそんな大きな戦争はないはずだ。ならそれはつまり——』

「それが歴史の異常と言う事ですか。」

「皆！音の方向へ急ごう！」

丘の向こうへと辿り着いた時私達が見たものは

大部隊と少数の部隊が戦闘を行っているところだった。

その中でも異質だったのは少数の部隊を率いている一人の女だ。

ほとんど一人で首都へと雪崩れ込もうとする部隊を相手取っている。

「あの女性は、サーヴァントでしょうか？」

『いや、サーヴァント反応は感じない。あの女性はこの時代の人間だよ。

とにかく、ありえない戦争が起こっているのは間違いない。それなら——』

「あの女の人を助けよう！街に攻め込まれるのは止めないと！」

「確かに。どちらが敵か分からないが、都市が蹂躪されるのは阻止すべきだ。」

マスターの意見にアルトリアも同意を示す。

一人で部隊を相手にしていた女に私達が加わった事で大部隊は程なくして撤退していった。

「剣を納めよ、勝負あった！貴公たち、首都からの援軍か？」

首都は閉鎖されていると思つたが……まあ良い、褒めてつかわす!

見目麗しい少女達が獲物を振り回す姿は何とも言えぬ倒錯の美があるな!

うむ、実に好みだ!余と轡を並べて戦う事を許そう!至上の光榮に浴すがよい!

戦闘が終わつたかと思えば言いたい事を全部言うかの勢いで捲し立てられる。

マスターは目を白黒させて何も言えないでいるようだ。

「しかしその方ら、見慣れぬ姿よな。少々見せすぎではないか?異国の者か?」

「貴様に言われたくはないのだが?」

私やマシユを見ながらそう言つてきた女に、言葉を返す。

戦闘中の姿を見る限り、前はともかく後ろは相当開けた格好をしていただろう。

「む、余はきちんと男装をしているではないか。」

「何が男装だこの破廉恥が。」

男装という言葉に今度はアルトリアの方が反応した。

「其方は……どこのどなた様か?」

なかなか整つた面構えではないか!実に良い!

「我々は貴様の言つた通り異国から来た者だ。」

貴様こそ何者だ。あれだけの数の兵士を相手にあの立ち回り、只者ではあるまい。」

「ふむ、確かに氏素性を訪ねる前にまずは余からであつたな!」

余こそ真のローマを守護する者。まさしく、ローマそのものである者。

ローマ帝国第五代皇帝、ネロ・クラウディウスである！」

「え…………ええ!？」

「ふっふっふ、驚いている、驚いているな？」

そうであろう、そうであろう、良いぞ。存分に驚きそして見惚れるが良い。特別に許す。」

「これほどふんぞり返るといふ言葉が似合う姿もあるまい。

『お、女の子だったのか…………歴史とは…………』

「ほう…………暴君として伝えられていたあの皇帝が女だったとはな。」

アルトリア、貴様も他人の事は言えないだろう。

「さて、そなた達の素性が何であれ。

先程の助力を見るに余を助けるのが目的と、そう考えていいのだな？」

「はい、その認識で間違いありませんネロ陛下。」

「ならば共にガリアへと来るが良い。道すがら、ゆっくりと話すでしょう。」

ネロの話によれば連合ローマ帝国なる連中が現れ、帝国の半分を奪われてしまったという。

その連合には複数の皇帝が存在し、既に死んだはずのネロの血縁が

皇帝の一人として与しているようだ。他の皇帝も含め、おそらくはサーヴァントだろう。

そんな話やカルデアの目的などの話をしつつ、ガリアに着いた時には日が落ちていた。

「長旅ご苦労であつたな。ここがガリア遠征軍の野営地である。

今日はもう遅い。そなた達はゆつくりと寝所で休むが良い！」

ネロはそれだけ言うと兵士達の居る方に行き、兵士達を鼓舞している。

その瞬間、歓声が響き渡る。さすがは皇帝といったところか。

アルトリアもその姿には素直に感心したようだ。

「すごい歓声です。これがネロ陛下の全盛期のカリスマでしょうか。」

『そうなんだろうね。でも不思議なものでもある。』

こうまで人心を集めた皇帝が晩年には……いや、止めよう、いけないな。』

「おや、思ったより早いお越しだったね。

えーと、あなた達が噂の客将かな？みんな見かけによらず強いんだってね。

遠路はるばるこんにちは。あたしはブーディカ。ガリア遠征軍の將軍を務めてる。」

ブーディカ。確かブリテンにもその名は伝わっていたはずだ。その名は確か……

「ブーディカ……？あの、その名前は……」

マシユも知っていたのか、思わずと言った様子で訪ねている。

「そう、ブリタニアの元女王ってやつ。」

……不思議って顔してるわね。女王ブーディカがどうしてローマの将軍に、って。」

「はい、私の知る歴史ではあなたは——」

「うん、そう。皇帝ネロとローマをあたしは絶対に許さない。ケルトの神々に誓いもした。」

ローマに蹂躪されたブリタニアの女王がこうしてローマ側に立っている。

復讐するいい機会ではないのか？とも思ったが

私もこうして汎人類史側に立っている以上、その言葉は口にしなかった。

「そんなに難しい話じゃないよ。要はネロより連合の連中の方が気に食わないってだけ。」

復讐の機会かな、とも思いはしたんだけどねー。連中に食い荒らされる此処を見てたら……

体が勝手に動いちゃって。ネロの為じゃない、此処に生きる人々のためにね。

……もしかしたら復讐の為に殺し尽くしたロンディニウムの連中に悪いと思ってたのかも。」

……ロンディニウム。まさかここでその地の名を聞く事になるとは。出来れば思い出しなくなかった名だ。

「そうだ、ちょうどいい時に来たよ。美味しい料理を作ったところだから食べていつて。

あ、もちろんローマじゃなくてブリタニアの料理だよ。」

「え……いいのですか？」

「もちろん、いいに決まってるじゃない。」

そう言つてプーディカは笑顔でマシユを抱き寄せる。

「あたしにはあんたは妹みたいなものだ。あんたたちは、かな。よしよし。」

マシユの頭を撫でながら、私やアルトリアの方を向いてプーディカはそう言った。

……そういつた感情を向けられた事に思わず戸惑つてしまう。

私にとつてはまだ救世主ですらなかった頃の遠い記憶にしか存在しない感情だった。

「お姉さんはねえ、あれなの、ブリタニア料理がとつても得意なの。食べてくれるでしょ？」

「あ、ありがとうございます。先輩はどうですか、お腹、空いてますか？」

「うん、もうペこペこだよ。いただきまーす。」

「うんうん！食べて食べて寝る！それが一番の元気のもとよね！」

ほらほら、後ろのあんた達も食べな。」

私とアルトリアを手招きしてくる。

「私はこういった手の込んだ料理は好まない。

私の食事ならカルデアから持ち込んだこの携帯食で十分だ。」

アルトリアはどこからか包みを取り出してその中身を食べ始めた。

その様子を見かねたのかマスターがアルトリアに声をかける。

「そんなジャンクフードならいつでもカルデアで食べられるんだし

せつかく作ってくれたんだから一緒に食べようよ。」

「……貴様がそう言うのなら仕方あるまい。いただくとしよう。」

アルトリアはそう言うて渋々と言った様子だが料理を食べ始めた。

それを見てマスターが今度は私に声をかけてくる。

「ほら、モルガンも一緒に食べよう?」

「……サーヴァントに食事は必要ありません。

私は結構なので食べたい者だけ食べるといいでしょう。」

この場を離れようとしたが、その前にブーデイカに腕を引かれてしまう。

「まあまあ、そんな事言わずに食べて食べて。」

サーヴァントだって食べて寝れば元気になるものさ。」

そう言われて強引に料理の前に座らされてしまった。



無理矢理にでも食べさせるといふ意思を感じたので、諦めて料理を口に運ぶ。

(……美味しい。)

一度口にしてしまえば、次に感じるのは物足りなさだ。

気付けば私はもくもくと出された料理を食べ続けていた。

「そんなに美味しそうに食べてもらえると作った甲斐があるよ。

おかわりもあるけど、食べる？」

「……いや、いい。もう十分だ。」

一度追加されると際限なく追加されそうなので断る。

そのまま私は逃げるようにその場を立ち去った。

今の私にそんな感情を向けられる資格などないのだから。

マスター達はその後もブーディカにあれこれ世話を焼かれていたようだ。

夜が明けると、ネロは私達と共に連合の皇帝に占領されたガリアを取り戻した。

皇帝の正体はやはりサーヴァントで、ネロ曰く初代皇帝よりも前の支配者の名と言う

事だ。

私としてはそんな事よりもあの図体でセイバーと言う事実の方に驚かされたが。

アルトリアもその事実を知った時は不機嫌な顔が若干崩れていた気がする。

「……ふむう。」

ガリアを取り戻して首都ローマへと帰還する最中、ネロが浮かない顔で溜息をついた。

てつきり連合の皇帝を名乗る連中が

過去に存在した本物の皇帝だった事を憂いているのかと思つたが……

「さっきの農夫の言葉を覚えているか？ 昨日すれ違った旅の商人も似た事を申ししていた。

古き神が現れた、ときた。本当であろうか？」

「正確にはこの数日で四度です。誰も嘘をついているようには見えませんでした。」

確かに私の目で見ても誰も嘘は言っていないかつた。古き神……神代のものだろうか。「地中海のある島に古き神が現れた、か。噂にしてはひどく具体的だ。

このガリアは地中海に面しているからその噂を聞くのは珍しい事でもないが……むうう、こう何度も聞くと気になるではないか！

幸いにしてここは地中海に面しているしな。余としてはぜひ確かめてみたい！

仮にローマの神々であるとして、連合の皇帝どもに奪われでもすれば大問題だ。」

「しかしネロ陛下、ローマに帰還しなくて大丈夫なのですか？」

「いや、余は決めた。凱旋の帰路に海を渡るのも良い！」

そのまま海路で首都に戻るとしよう、地上の旅はいささか飽きた！

船旅も良いものだぞ。余の鮮やかな操船を披露してやろう！」

この強引に決めてしまうところはさすが暴君と言ったところか。

しかし皇帝自ら舵を握ると言うからには優れた操船技術を修めていると思ったのが間違いだった。

「うむ、良い風を掴まえたな！かつてない攻め攻めな船旅であった！」

ネロはとても愉快そうにしているが私はまだ頭が揺れているような気がして気分が悪い。

これが船酔いというやつか……海を渡る事などない私にその耐性はなかったようだ。

船というものはあのよう空を舞う事もあるのだな……

「……デミ・サーヴァントになつていなければ危なかったです……」

……あの、モルガンさんとアルトリアさんは……」

「……私は問題ない。」

アルトリアはそう言っているが普段から青白い顔が更に青白くなっている。

意外にもマスターは私達の中で一番平気そうだ。船旅の経験でもあったのだろうか。

「んーまあ、私は絶叫マシンとか結構乗った事あるし。慣れてたのかも。」

よく分からないがマスターにはなかなか過酷な経験があるようだ。

少し時間が経った事でようやく頭の揺れも治まってきた。

『さて、それじゃあ噂の古き神とやらを……おっと、どうやらあちらからお出ましのようだ。』

これは……サーヴァントではあるみたいだけど……正常なそれとは些か違う。これは何だ？』

「ええそうよ。普通のサーヴァントではないもの。」

「ご機嫌よう、勇者の皆さま。当代に於ける私のささやかな仮住まい、形ある島へ。」

私は女神ステンノ。どうぞ好きにお呼びになつてくださいな、皆さま。」

アーキマンによれば明らかに通常のサーヴァントでは持ちえない数値の神性。

紛れもない神ではあるが神そのものではない言わば神霊のサーヴァントという事らしい。

「大雑把だが話は理解したぞ。要するにその女神は敵ではないのだな？」

では古き女神ステンノよ、我がローマへ来るが良い！」

余は貴様を新たな神として受け入れよう。共に連合帝国を倒そうではないか。」

「まあ、とつても眩しいのね貴女。でもごめんなさい。」

私には戦う力はないの。サーヴァントになつて多少カタチにはなつてはいるのだけだ。」

「でもそうね。せつかくここまで来てくれた勇者様なもの。

ご褒美をあげなくちやいけないわ。昔なら妹をけしかけたのだけど。」

「けしかけた？」

その言葉にマスターとマシユ、ネロが一齐に反応した。

「ごほん、いいえ何でもありません。それでは貴女達に女神の祝福をあげましょう。

海岸沿いを歩いていくと洞窟が見つかるわ。そのいちばん奥に、ね。

宝物を用意したの。この時代には本来存在しないとっておき。それを差し上げますわ。」

『興味深いねえ、もしかして聖杯だったりして。』

「どんな宝でも構わんぞ。余には多くのものを愛でてみせる器がある！」

「よし、それじゃあその洞窟に行ってみよう。」

マスター達は乗り気だが明らかにその女神の目は私達を見て楽しんでる。

敵ではないようだし殺意もなさそうなのでマスター達に伝えはしなかったが。

その後洞窟で私達が見たものは言うまでもなく宝ではない。

洞窟という狭い空間の中で何度も怪物に襲われ、最奥には強力な幻想種が一体存在した。

古代ギリシャに伝わる怪物、キメラらしい。あの女神が用意したのだろうか。

私達はそれを何とか撃退し、疲労困憊になって洞窟から帰還した。

「ふふ、おかえりなさい。とっておきのご褒美、たっぷり楽しんでもらえまして？」

「へろへろだ……余は、疲れた……」

「はい、早く休息を取るべきだと思います……」

「……まあ立香を鍛えられたと言う点においては感謝しよう、古き女神よ。」

そういうえば貴様も立香を鍛えると言つて強敵と戦わせていたな。

とは言えこれだけの連続戦闘をさせられてはさすがの私も疲れを隠せない。

全盛期の頃の自分が羨ましい。

「だらしないわねー。アタシはあんな大きな猫ぐらいどうつて事なかつたわよ？」

突然どこかで聞いた事のある声が聞こえてそちらを向くと

そこにはフランスの特異点で出会ったエリザベート・バートリーが居た。

何故こんなところに彼女が居るのだろうか。

「何よ、またアタシをジロジロ見て……やっぱリアンタ、私のファンでしょ!？」

しかめっ面でこちらを睨んできたかと思えば、急に顔を輝かせて喜び始めた。

かと思えば目を瞑つて考え込み始める。忙しい娘だな。

「……うん、決めたわ!最初は子ジカだけ招待するつもりだったけど、

特別にアンタも招待してあげる事にするわ!ファンサービスつてやつよ!」

……招待？何の話だろうか。何を言っているのか全く分からない。

マスターも理解できていないのかきよとんとした様子で聞き返している。

「ん？招待って何の事？」

「ふふふ、まだ秘密よ！その時が来たら分かるから楽しみにしていなさい！」

「む、催し物に余を差し置いて招待とは何事か！その娘、何故余を招待せぬ!？」

「いや、アンタが居たらアタシだけが主役じゃなくなっちゃうし……ってあら？」

「何この気配……魔力感しない……え、人間？アンタが？」

「何を驚いている。無礼かつ無粋な奴め。その姿が美少女ベースでなければ叩き斬っているぞ?」

余は当代の皇帝、ネロ・クラウディウスである。何故そう親しみのある視線を向けるのだ?」

「うっそ、生ネロ!？」

「何が生か!」

『ちよっ、これフランスの時より酷いぞ!ますます話が分からなくなってきた!』

一旦落ち着こう!このままじゃ收拾がつかない!』

アーキマンの言葉でその場は一旦収まったが、ネロはまだ若干不満そうだ。

私は先程の話を理解できなかった事もあり、深く考えずに忘れてしまう事にした。